日本ハンドボール協会の財政危機を訴える

相つぐ物価の高騰、特に昨年、今年にかけての郵便料の値上げ、更に3月に電話料、4月に国鉄の値上げ、このように今日の日本の社会の値上げ攻勢はおびただしいものがある。

当協会の財政も基本的には、40年に定められた基本線にそって、運営されており、これまでは、関係諸氏の努力とその時々の知恵によって、値上げは、45年4月に登録料を一般一千円、高校五千円変更した以外には、大きな手直しをせずにやってきた。

ところが、昨年行なったオリンピック予選、今年度のミュンヘン・オリンピック、更には強く叫ばれている底辺拡充策など、経費を多額に必要とする事業は目白押しにならんでいるにも拘らず、恒常的に必要となる事務局経費は、四十五年三七〇万円、四十六年四二〇万円と毎年五〇～七〇万円、前年度予算の10～20％の増額をせねばやっていけない状況が続き、本年は公共料金の相つぐ値上げのあおりをまともに受け、五五〇万という巨額を見込まなければならなくなった。

現在のままの協会の財源としては、加盟金、登録金、検定料、審判審査料、これらが順調に入金したとしても五四〇万円以上を望むことは絶対に無理である。

この他、広告料、雑誌講読料は本誌の印刷、発送に完全に消え、これまた今年度は赤字が予想されるに至っている。

また競技力向上費は全額オリンピック対策部にふり向けることが必要であり、これも更に一〇〇万程度協会から出費せねばならない

このようにして見ると、事業費審判・技術・普及関係は全く費用なしで仕事をしなければならないし、今夏に企画されている全日本中学大会をはじめとする従来、日本協会が行なっていた各種大会に対する補助金といったものも全く考えられないことになる。

これは本協会はじまって以来の財政的ピンチであり、新規事業はいうに及ばず、従来行なっていた事業も全くできないことになってしまう。

昨年度、一昨年度ともに膨脹している支出に対して、いかに処置するかがどうしても収入面による増収をはからざるを得ず、基本線としては変らない収入面をチーム類の増加、経費を緊縮させるという方策で何とかきりぬけてきはしたが、47年度はもういかんともしがたいところにきてしまっている

オリンピック出場、中学校指導要領への復活という明るい材料の中で、財政的に全くなにもできないということでは、将来のハンドボール界の発展は全く望めない。

ここでは、収入面の増大をはからねば、やっていけないということが、強く望まれていた。

特に今年限りでこの支出面の増大にストップがかかり、48年以降減少する見込でもあるのであれば今年のみの一時しのぎもできるであろうが、問題はハンドボール協会の経常費の問題であり、今のような社会状勢が続く限り、減少はまず考えられない。

経常費を寄附その他にあおぐことは全く、不健全であり、これはどうしても、ハンドボール界の一人一人が出す形の財源にあおいでいかないことには、協会の存立は根底からゆらぐことになろう。

諸物価高騰の折柄、全くそれと同一歩調をとることは遺憾ではあるが、経常費の高騰分は各チーム各連盟にそれぞれに分担してもらわざるを得ない。

他に財源がないのであるから、これはどうにも仕方がない。

各チームに於いては、この点を賢察頂き、我々のハンドボールは我々の手でということで、今回の評議員会の決定になった、現状に於ける抜本的な収入面の改善に協力されることを切望する。

46年度、45年度よりも大巾に減少した予算をもった各部が、それそれの持ち場で、いかに苦労をし各地から要望のある施策も実施できずにおわったことを残念に思っているか……

上げ潮にのっている現在のハンドボール界に必要なのは、思いきった収入面の改善策をとり、将来に備える積極策が最善の道なのであり、それには、どうしても、一人一人の選手、一つ一つのチーム一つ一つの加盟団体の一致した協力のないことには、ハンドボールのせっかくの上げ潮気運も無になってしまう。

以上のことをお考えいただき、将来のことを賢察いただき、ぜひとも、今回出された、財政上の施策に御協力いただけるように心からお願いをする。

ハンドボールファン全員の協力でこの財政危機をのりきりたい。

ぜひとも協力を！

「ハンドボール」3月号（第95号）目次

【表紙写真】 オリンピック強化試合、オリンピック候補B対大阪選抜戦（2月・大阪）（光島磯雄氏撮影）

登録料・加盟金・機関誌購読料値上げ

——全国評議員会・理事会開かる——

全国評議員会・理事会

定例全国評議員会は2月12日の土曜日13時から田村会長以下、全国各地からの評議員を集め、開催された。

また、全国理事会はその前日、2月11日（金）に全国各地からの理事を集め開かれた。

この両全国会議の焦点は諸物価の高騰とともに、オリンピック出場とともに底辺拡充という二本の柱とこれに伴なう諸施策の実現をはがるための財源の確保であった。

両日とも激論がたたかわされたが、現状ではどうしても、必要な財源はハンドボール界のなかで作っていかなければならないということになり、大巾な値上げ案が決定された。

協力会費を新設

別項にもあるように、日本の社会に荒れ狂っている物価の高騰はハンドボール協会にも押しよせ、従来の登録、検定、加盟金などの収入では、事務局の維持がやっとというところまで押しつめられてきた。

常務理事会でも予算編成がどうしてもできずに、いかにして、収入面を打解していくかが、大問題とされていた。

日本協会の諸経費は、経常費、事業費を含せ、特別事業を除くと現在では、九百万～一千万は必要であり、この他機関誌会計で四百五十万は必要ということになってしまっている。

現在の収入面では、一般会計で五百万円をややこえる額しか見こむことはできない。この収入では事務局の維持費を出すのがやっというところである。

ところが、現状では収入面の増加を図るには、地方協会とその傘下の加盟チーム以外に財源を求めることは不可能である。しかしながら、個々の傘下チームに負担を強いることは、折角伸びはじめたチームの増加を押えることになってしまい、逆にチーム数の減少という結果を招いてしまう。

ここに今回の値上げに執行部を踏みきらせるのに俊巡させるものがあった。

しかしながら、どうにもならないところまで押いつめられた執行部は、加盟金、登録料の一挙倍額への値上げという思いきった原案を出させることになった。

両会議とも、この原案をめぐり長時間の議論がたたかわされたが執行部としては、この値上げによって、四百五十万程度の財源を確保しようということであったのであるが、予想された通り、各加盟団体、ブロックの反対を受け、別項のような形の値上げに落ちつくことになった。しかし、これをもちかえることになった各地の代表者は果して説得が可能か、あるいは説得のためには、何か見返りをという声を発っしながらの渋々の納得であったので、今後の執行部の説得と姿勢にその成否はかかっている。

今後、いかに地方不在という声のあるなかで、地方への具体的環元を考えていくかが、今後の鍵となろう。

本年から「底辺拡充」を最重点施策に押している執行部が、この施策の中で、いかに地方の声を忠実に反映させていくかが問題であろう。

結局、加盟料の倍額値上げ、登録料を高校大学50％増、個人登録現行一般一人百円を昭和40年のクラブ対策の値下げ以来40年以前の水準一人二百円にする。更に大学の個人登録料を一人百円とすることで、二百五十万円ぐらいの増収を見込、更に不足する点は協力会費というものを新設し、本部で五十万円、傘下団体で百万円を目標に集め、四百万円の増収を図ることになり、これを事業費にあてることで、今後の財政の基礎とすることになった。

オリンピック基金も本年は増額

本年はミュンヘンオリンピックの年にもあたり、本番をめざして十分の強化を図るためはも、従来の予算では、不十分ということが前々からいわれていたが、今年限り、一般、大学一千円、高校五百円の特別オリンピック基金を徴収し、十分な強化をし、ミュンヘンでの上位入賞をめざすことになった。

日本全国のハンドボールファンの手で代表選手を強化するという構想がやっと本格的に着手されたもので、その成果が期待される。

機関誌も値上げへ

昭和40年以来、定価をすえおいてきた機関誌も、32頁にある編集部の項にもあるように、印刷費の二倍近い値上り、更にはこれに追い打ちをかけた郵便料金の2倍をこえる値上げによって、財政的に全くたち巾がなくなってしまっている。

そこで打解策として、25％程度の値上げがかねて検討されていたが、今回今後の見通しをたてると25％ではすぐに再値上げに追いこまれることが眼に見えており、50％の値上げに踏みきるべきだとの声が強く、50％値上げということになった。

昭和47年度登録料一覧

	一　般	学　生	高　校
基　本　料	4,000円	3,000円	1,500円
オリンピック基金	1,000円	1,000円	500円
個人登録料	1人　200円	1人　100円	——
機関誌代	1,800円	1,800円	1,800円
計	6,800円に個人登録料加算	5,800円に個人登録料加算	3,800円

ルールブックも五百円に

今回審判部を中心に検討されていた。国際規約の改正にそった。ルールの大改定による新ルールブックは、印刷費の高騰という事情のため、一挙に五百円という値段がつけられた。これには、審判部長をはじめとして、かなりの難色が示されたが、印刷費の高騰をカバーするのは値上げしかないという声が強く、決定された。

国内日程

別表のように国内の競技会の日程が決定された。

NHK杯は、実連2、学連1、教連1(男)、実連3、学連1(女)で争われることになり、それぞれの連盟によって、出場チームを検討することになった。

日程的には、昨年の大巾改正に比べると、変更は少なく、実業団の男子リーグが、オリンピックの関係もあり、9月末から10月に移ったことと、女子の実業団選手権が北海道室蘭市で開催されることが注目される。

全日本総合の出場チームは原案が提出されたが、なお検討の余地が残され、これらは、48年以後の国体の出場ワクとの問題もからみ小委員会を設け、ねりなおされることになった。

昭和47年度国内日程

GW・ダンケルセン招待	4月2～8日	各地
第4回全日本自衛隊選手権	5月19～21日	東京駒沢
昭和47年度全国（男子）実業団トーナメント	6月18～21日	岐阜市
第19回NHK杯全日本選抜大会	6月23～25日	大阪市立中央体育館
第14回全日本実業団選手権女子の部	7月12～16日	室蘭市
第23回全日本高校選手権	8月1～7日	山形県東根市
第15回全日本教職員選手権	8月16～19日	千葉県佐原市
第21回（女子第4回）全日本学生選抜東西対抗	9月15日	名古屋市
第14回全日本実業団選手権男子の部	9月27～10月1日	名古屋市
第27回国体ハンドボール競技	10月22～27日	鹿児島隼人町
第15回（女子第8回）全日本学生選手権	11月	大阪＝予定
第24回全日本総合選手権	12月5～10日	東京体育館

国際日程

明確に決定したのは、3月から4月にかけての西ドイツクラブチームの雄、THW・キールとGWダンケルセンの両チームとの対戦とミュンヘンオリンピックへの出場、このほか、日韓の試合とし、5月に女子実業団、男女学生高校男子の交流、11月に男子実業団という日程が組まれている。

また、オリンピック対策部から提出されていたヨーロッパ遠征は財政面の関係で暗礁にのりあげているが、「上位入賞のためには外国ナショナルとの対戦が不可欠」という意見も強く3月の月例常務理事会で攻めて協議することになった。

これらのほか、来日を希望しているチームはいくつかあるが、未確定な要素が多い。

全日本は7回の合宿

今年度の一・二次合宿を含め、三、四、五、六次合宿をそれぞれの地域で行ない。8月に最終合宿を東京で行ない、ミュンヘンに向けるオリンピック対策部の基本構想が示され、ここでは、

一、精神力の強化
一、体力の強化
一、防禦力の強化
一、攻撃に日本チームの特徴を生かす
一、基礎技術の徹底

が重要強化方針として提出されている。

総務企画部を理事長直轄へ

従来の総務企画部と国際部を併せ、より連絡を密にするため、総務企画部を理事長の直轄とし、この中に国際委、企画委、総務委の三委員会を置くことに機構改革がなされた。

副会長に徳永陸繁氏
神田氏は常務理事に

評議員会では、高体連ハンドボール部長である徳永陸繁氏を副会長に推薦することに決定した。

また、昨秋の全国会議で理事に推薦されていた神田清氏は今回の理事会で常務理事に推された。

国際交流規定を決定

昨年来検討を重ねられていた国際交流規定はこのたびの全国会議で決定され、4月1日から施行されることになった。この全文は次号に掲載する予定であるが、骨子は単独チームでも、外国チームを招待し、もしくは海外に出かけていくことが可能であることにある。

また、個人登録料の改訂で「登録規程」の一部が変更となった。

全国中学生大会正式に決まる

—8月18・19日愛知県で開催—

県案となっていた中学生の全国規模の大会は今更、愛知県で具体的に開催するメドがつくところまでこぎつけた。

中学生問題検討会で、種々の案を練ってはいたが、今回その委員会ででたのは

期間　昭和47年8月18日、19日
場所　愛知県青少年総合センター
主管　愛知県ハンドボール協会
参加チーム　全国9ブロック代表男女9チームと地元から1チーム計10チーム（1チーム14名）

の案で、具体的実施計画に入っている。

ハンドボールでも県案の中学生大会がいよいよ全国規模で開催されることになり、大きく前進したことになる。

これが一つの刺激となって、立ち遅れの嘆かれている斯界の年少者対策が大きく前進することを望みたいものである。

しかしながら、全国大会は開催されたとしても、それをもりあげる力が各地に湧いてこないことには、一握りの中学生の全国大会になってしまう。

この大会を機会に根強く、根気よく、協会が中心になっての年少者対策をきめ細く施していかねば折角の大会も一時だけのお祭りになってしまおう。

またこの大会が開催されるのは愛知県、同県の協会の地盤の強さはすでに定評のあるところ、従来からの年少等対策も抜群に進んでいる。各地の指導者が愛知県のキメ細い年少者対策を見て帰ることも大いに参考になろう。

この第一回の大会が成功裡に終り、全国の中学校への普及の大きな記念碑的な大会になり、広く全国へ広がることを願ってやまない

地元を初めとする関係者各位を中心に、全国のハンドボールファンがミュンヘンオリンピックとともにこの大会を盛りあげるような努力をなされてことを切望する。

なお、日本協会では大会の運営円滑化のため、4月までに各ブロックから新選出の対策委員によって「中学生大会」の運営委員会を発足させる。

—底辺への見返りを—

—時評に代えて—

日本協会は2月の全国会議（評議員会理事会）で、ついに大巾な加盟金・登録金などの値上げを強行した。

別掲の関連記事でも判るとおり諸物価の高騰は日本協会財政を窮迫し、事務局の維持費だけで現収の大半を食い、頂点事業、普及事業など満足になに一つできないところまで来た。

打開する道はただ一つ、再び三たび全国関係者、加盟チームの理解と協力を得る以外になかったのである。

理事会では底辺の負担で切り抜けることをなんとか回避しようとする空気が強かったと伝えられるのは悲壮とさえいえよう。

今後、日本協会がどのような方法で組織に対して説得をつづけていくか注目されるが、いかなる理由にせよ今回の値上げが斯界の危機につながる感じをぬぐいさることはできない。

つまり、一方で頂点強化のための精鋭化を打ち出し、一方で底辺依存の経済体制をつづける矛盾だ。

あるクラブチームの主宰者は語気鋭く批判する。『全日本総合の出場チームは加盟団体偏重、国体は実業団の侵蝕を許すばかり。いったい我々は何のために日本協会へ高い登録料を払いこむのか』と。

現代気質がプラスされてこの考えかたは次第に輪を拡げるだろう。

とりたてるばかりで見返りのない施政は、いずれ手痛いシッペ返しを食うのではないか。

将来の道を考えず目先のことだけで今回の値上げを決めたとすれば首脳陣の責任は問いなおされてしかるべきだ。

例えばルールブック代までも倍額にはねあがったという。

登録料値上げのせめてもの補いとして登録チームに1冊は無料配布ぐらいの考えは出せなかったものか。

お金になるものはすべて…という姿勢があまりにも露骨ではないのか。

このことに限らずオリンピックムードに便乗して、なんでも理解して貰えるという甘さが執行部にあるようなら、斯界の前途は赤信号である。

加盟金・登録金増収に見合う底辺対策をおろそかにするならば今回の値上げはせっかく軌道にのった現執行部を破たんに誘う危険含みといえる。

（X）

西独の強豪相ついで来日

3月……THW・キール
4月……GW・ダンケルセン

日本協会はミュンヘン・オリンピック強化対策の一環として、西ドイツのトップチームを3月、4月相ついで招き国際親善試合を行うことになった。

来日するのは3月に今年度西ドイツ第3位の名門TV・ハッセー・ウインターベツク・キール（略称THW・キール）、4月に昨年度チャンピオン、グルンワイス(GW)・ダンケルセンの両強豪である。

全日本（オリンピック候補）との対戦はそれぞれ1試合づつが予定されている。

伝統を誇る西ドイツから最上位の名門クラブがつづけて来日するのはミュンヘンオリンピックを半年後に備えて強化を急ぐ日本協会はもちろん、ファンにとっても朗報である。

日本協会ではははじめGW・ダンケルセンの招待だけを決め、THW・キールについては日程的に折りあわず断念したのだが（本誌既報）、その後キール側から日程調整の連絡があったほか、同チームが今シーズン好調なこともあって招待に踏み切った。

両チームとも滞在期間の制約があり、別表のようにいずれも3試合、それも東海道圏内を転戦するだけだが、各1試合が予定されるナショナルチーム（オリンピック候補）はちょうど第一段階の仕上り期、興味深い対戦でファンの注目を集めることになるだろう。

3月12日に来日予定のTHW・キールは長い伝統を誇る名門で全国優勝3回を数える。現在、西ドイツ全国リーグ（ブンデス・リーガ）の北部地区に属し今シーズンはグンメルスバッハ（昨春来日）に次いで2位となっている。

決勝ラウンドではFA・ギョッピンゲンに惜敗、最終ランキングは第3位に終ったが（本誌26頁参照）西ドイツハンドボール伝統の力と技のチームプレーを身上としている。

3月31日来日予定のGW・ダンケルセンは昨シーズンのチャンピオンチーム。

これまでは室内（7人制）よりもむしろ11人制の強豪として知られ、かつての西ドイツのエース・ルブキング(現ネッテルスタット)のホームチームだった。昨シーズン（一九七一）は強豪をなぎ倒して初の栄冠を握り、この進出は西ドイツファンはもとよりヨーロッパファンにもセンセーショナルな話題を蒔いたものである。

昨夏8月来日の希望を寄せて以来、日本への遠征は同クラブの〝念願〟だった。

注目されるムンク、ウェルツ

両チームともグンメルスバッハのシュミット、GKカーターのような超スターは居ないが、キールはウエルツ、GKボアツ、ダンケルセンはムンク、GKカールハーのナショナルプレイヤーを中心にしたチームプレーに定評があり、特にムンクはナショナルチームの主将を努めたこともあるほどの名プレイヤーだ。

このほかナショナルチームリストに名を連ねているのはキールではアーレンドセン、ダンケルセンではクラマー、ヴェングらだ。

ブックは将来を期待されている〝スター候補生〟の一人で今シーズンからジュニアナショナルに加った。

全日本、キール戦の陣容

日本協会はTHW・キールとの対戦する全日本のメンバー20名を次のように決め、3月9日から名古屋で合宿に入る。いずれもオリンピック第一次候補選手（25名=前号既報）のなかから選ばれたものでダンケルセン戦の陣容は3月末発表の予定。

▽GK下里(大崎電気)、本田（大阪イーグルス）、大村(全日体大)、高橋(日体大)、馬渕（立教大）

▽FP近森、飯田、東（以上大崎電気）、野田、藤中、中井（以上大同製鋼）、木野、早川（以上ワクナガ薬品）、新実、大江（以上芝浦工大）、氷海、浅原（以上日体大）、有永（東京海上災災）、斉藤(群馬教員ク)、佐々木（中大）

……日　程（予定）……

◇THW・キール
- ①3月14日　18.30　対全日本(愛知県体育館)
- ②3月18日　17.30　対日体大(駒沢屋内球技場)
- ③3月20日　15.00　対大崎電気(東京体育館)

◇GW・ダンケルセン
- ①4月2日　対富士クラブ(静岡県富士市)
- ②4月4日　対大同製鋼(愛知県体育館)
- ③4月8日　対全日本(大阪市中央体育館)

予想されるメンバー
～本誌調べ～

【THW・キール】

▽コーチ
H・ダーリンガー

▽GK
- R・ボアツ (23)
- H・オエルテル (19)

▽FP
- D・バーグン (23)
- P・プレーン (29)
- B・ストラック (31)
- H・モ　ル (24)
- P・ヴエルク (27)
- V・ハーブス (24)
- B・ニールセン (28)
- H・アーレンドセン (23)
- G・ウエルツ (24)
- H・ブラエペル (20)
- I・シユッツ (20)
- D・クラウス (18)

【GW・ダンケルセン】

▽コーチ
F・スパンヌース

▽GK
- M・カールハー (24)
- W・メイヤー (27)

▽FP
- B・ブツク (19)
- W・ドレツゲメイヤー (23)
- G・ギーゼキング (23)
- M・ヘルストケッター (31)
- K・バーラッハ (31)
- H・クラマー (23)
- B・クロケル (22)
- H・ルツジ (22)
- J・ブールメスター (22)
- B・ムンク (28)
- J・プーク (20)
- J・レーゼ (23)
- G・ショーラー (21)
- H・スルク (27)
- O・ヴエング (23)

（　）内は年令

全日本（オリンピック候補）順調に始動

ミュンヘンへ

ミュンヘンをめざすオリンピック候補選手による最初の強化合宿が2月14日から20日まで大阪市中央体育館で行われた。

□……日増しに暖かくなる大阪で文字どおり迎えた〝春〟である。25人の候補選手と5人のコーチングスタッフの顔も希望に満ちている。

アジア予選快勝後、日本協会は新たな決意として「オリンピックでの上位入賞」を打ち出した。参加することに意義、といった時代が遠のきつつあるし、なによりもハンドボール界の意地があった。

「やっとつかんだチャンス。それを参加しただけか、といわれないようにしたい」（荒川理事長）。

□……このムードは練習にもはっきりと反映、実戦的なトレーニングがつづき多くの成果をあげたようだ。

コーチ陣の指導は基礎体力のパワーアップと併行して早いプレーの習得を繰り返していた。

村田オリンピック対策部長は、〝本番〟までの一貫した指導理念として「最大の武器であるチーム速攻にみがきをかけることとディフェンス力の強化」をあげ、体格的なハンディをもつ全日本の上位入賞への活路をこの点に求めることを明らかにしている。

□……現役学生が11人とふくらみチーム全体に若さがみなぎっているのもいい。

さすがにキメのこまかさでは経験の差がのぞくが、パワー、スピードという点では、25人に甲乙つけ難い。2チーム分の質と量は充分に備えられたとみる。

竹野オリンピック対策委員は「ベテランと若手の差が少しでも詰まればいい」とじっくり見守っているが、トッププレイヤー群の厚味はミュンヘンからモントリオールへと〝将来〟にもつながる。

□……かかえる課題も少なくはない。

アジア予選終了後に襲った〝ゆるみ〟は一時的な症状で済んだようだが、技術面では長身アタッカーの破壊力不足、チーム全体にやや勝ちみが遅くなっているクセは早いところ〝解決〟しておかなければならないだろう。あと半年などといっているうちに時日はアッというまに過ぎてしまう。

□……斯界がオリンピックを目前にした強化合宿を行うのはこれが2度目。最初の合宿は34年前にさかのぼる昭和13年3月のことだ。

昭和15年東京で開かれる予定のオリンピックにはハンドボールも実施が決まっており発足間もない日本協会は関東学生界の有力選手27名（ほかにコーチ3）を候補選手として選出、横浜市日吉の慶大グランドで5日間の合宿を行ったのである。

日華事変のためこの努力も水泡に帰したが、以来描きつづけたオリンピックへの夢が今まさに実ろうとしているのだ。

□……3月にTHW・キール、4月にGW・ダンケルセンと単独クラブながらヨーロッパの強豪がつづいて来日、昨秋のスウェーデン戦以来のヨーロッパチーム、全日本が各一試合づつ手合せすることはこの時期、かっこうの腕試しとなろう。

全国関係者の期待を背に〝オリンピック候補チーム〟は極めて順調にミュンヘンの軌道にのって動きだした感じである。

2回目の合宿は3月9日から14日まで名古屋市の予定。

後半に地力を発揮

大阪で強化試合

第一次強化合宿の仕上げとして2月19日午後1時から大阪市中央体育館でオリンピック候補B×大阪選抜、オリンピック候補A×ワクナガ薬品（大阪）の2試合が行われた。近森（大崎電気）は左ヒザの負傷、佐々木（中大）は発熱のため欠場。＝観衆二千二百。

第1試合は若い候補Bが立ちあがり福井らベテランを揃えた大阪のペースにはめられてせりあったが、後半は中井、斎藤らを中心にしてポイント、粘る大阪を押し切った。

第2試合（毎日放送・土曜ワイドスポーツ）は、前半、候補チームがリズムにのり切れず、木野、早川（ともにオリンピック候補）を加えたワクナガ薬品の速攻に苦戦、いちぢは4点差をつけられたが前半終了まぎわ大江の好技でやっと逆転、後半は野田、藤中らの活躍で引きはなした。

こういう形の試合で、全日本チームが苦しむことによって少しでも成長することが望ましい。力と技で、常に大勝するだけの力を備えてほしいものだ。

B オリンピック候補 14（5−5 / 9−5）10 大阪選抜

得	【オリンピック候補B】			【大阪】	得
0	馬淵	（立教大）	GK	広川	0
0	高橋	（日体大）	GK		
0	大村	（全日体大）	GK		
5	斎藤	（群馬教員ク）	FP	田内	0
2	氷海	（日体大）	FP	青木	2
0	高梨	（三景）	FP	樫塚	0
0	荒井	（法政大）	FP	福井	7
0	佐藤	（中央大）	FP	安達	0
0	松岡	（日体大）	FP	中村	1
0	有永	（東京海上）	FP	中野	0
2	中井	（大同製鋼）	FP	土田	0
2	浅原	（日体大）	FP	足羽	0
3	大江	（芝浦工大）	FP	市田	0
0	花輪	（中央大）	FP	河原崎	0

（審・新村、丸岡）

▽7MT（オ）1（大）0

A オリンピック候補 19（6−5 / 13−8）13 ワクナガ薬品

得	【オリンピック候補A】			【ワ薬】	得
0	本田	（大阪イーグルス）	GK	今井	0
0	下里	（大崎電気）	GK	国本	0
0	大村		GK		
0	東	（大崎電気）	FP	市原	3
6	野田	（大同製鋼）	FP	木野	5
1	飯田	（大崎電気）	FP	早川	1
2	藤中	（大同製鋼）	FP	森	1
6	大江		FP	高橋	2
2	中井		FP	戸田	1
0	新実	（芝浦工大）	FP	藤井	0
2	氷海		FP		
0	浅原		FP		
0	有永	（東京海上）	FP		
0	斎藤		FP		

（審・光島、東）

▽7MT（オ）3（ワ）1

（注）大阪選抜のうち中野（枚方ク）、田内（追手門学院大）、中村（大阪体大）、土田（桃山学院大OB）以外の8選手は大阪イーグルス所属。

女子世界選手権 遠征レポート (1)

ヨーロッパに遠征して

山田 計

八年振りの世界女子ハンドボール選手権大会に出場と決定、吾々選手団は先づ外国チームの情報を手に入れる為協会役員の方と並に海外にいる知人に御協力をお願いし強化練習に入り重点はやはり走力とチームワークの点におき約六十日行う。ハンドボール関係者の大きな期待と上位入賞の意慾に燃えていたが、結果的には残念ながら9位に終り皆様の御期待に添う事が出来ず申訳なく思っております。唯今回は選手権大会前にデンマークを初めルーマニヤ、西独等六ケ国を廻り親善試合を行い、研究と外国人に対する防禦を身につける事にあった。十五戦十二勝一分二敗で、日本チームの実力は各国のハンドボール関係者に非常に良い印象を与えると共に、国際連盟の役員に高く評価された事は喜ばしい限りである。

今回の大会は特に目立った事項を二、三挙げてみると、やはり7mにより勝敗が決する事が多く見られた。日本チームの場合7mを少なくする為には危険地域に入る前に止め、フリスローで済す方法を取るべきである。各チーム共、シュートに於て非常に正確、確実性が高い。攻撃に対しては徹底して相手のポイントゲッターをマンツウマンを使い、シュートを最少限に止めていた事である。精神面に於ては自分のもてるものを全部出していた。日本も地理的に悪条件であるが、出来る限り機会をつかまえて国際試合をより多く、経験する事が将来優勝上位入賞と言う事に成ると思う。今度の世界選手権大会出場にあたり、協会並に各方面よりの物心両面の御協力を戴き、深く感謝すると共に欧州で見聞し、体験した良い点を日本のハンドボール界に幾分でも御役に立てば幸甚と思って居ります。

世界の女子の技術

宇津野 年一
（全日本監督）

第4回世界女子ハンドボール選手権大会並びに前哨戦としての15戦（ルーマニアナショナルとの練習試合を含む）、オランダ・パーペンダル国立スポーツセンターで行なった対ユーゴとの練習試合などから、現在の世界女子ハンドボールの技術を見たまま、感じたままを解剖してみたいと思う。

技術というものは人間によってつくられ、刻一刻と改良され進歩向上が計られてゆくものである。得点を挙げるための攻撃プレー、得点を阻もうとする防御プレー、これらのプレーの優劣が他の要素も加わってゲームの勝敗を左右することになる。

私はゲームの場における技術というものを基礎技術、応用技術などに加えて、勝れた体格と機能、逞しい精神力などが総合されたものであると思っている。

技術を解剖する前に、世界女子選手の体格について少々触れてみると、形態的体力は日本選手に比べ、遙かに勝れており、日本選手の最高身長168cmは、外人選手の中では中程度といったところであり日本選手の平均身長159・77cmは出場9ケ国の最低のように観察される（資料がなく見聞結果からの推測である）。この体格の差はそのままハンドリングキャパシティの差となって現われ、ボールテクニックの幅の相違となっていることは想像していただけるものと思う。私はこの体格的な差を十分に認識し、これをカバーする方法が考えられなければならないと思うが、ゲームにおける外人選手の気力の逞しさが、彼女達の持つ技術をより以上に効果的に発揮させている点は、私達が学ばなければならない点であると思う。

以下目についた点について述べてみよう。

1、基礎技術で注目される点

(1) フットワークについて

攻撃的フットワークで注目される点は、ゴール前でのポストマンの動き、ボールに対する動き、セットオフェンスでのステップパス

などに見られるフットワークの軽快さと鋭さである。これは動くことを第一としている外国チームの傾向であり、特徴ということができると思う。

防御的フットワークは、相手チームの攻撃展開を追う軽快なフットワークが注目される点である。すなわちロングシューターに対する踏み込み、ポストマンのマークと受け継ぎが、サイドステップと前後のステップを主体として忠実にプレーされていることである。このフットワークを個人についてみると、踏み込み↓斜め後進ステップ↓左右のサイドステップで結び継がれている三角のフットワークが基盤となっている。このフットワークがゾーンディフェンスを支えているピストンプレーである。

各国のディフェンスフォーメーションは、5・1防御と6・0防御が多く、6人でつくる隊形の前後左右の距離間隔は、ボールを追いプレーヤーをマークしながらも崩れないチームフットワークとなっている点は、フットワークの基礎と基本が習得できていることを証明するもので、防御力強化が指摘されている日本チームが学ぶべきことの一つであると思う。

(2) パスとキャッチについて

大きな手に加えて「松ヤニ」を使用することによって、ボールテクニックは多彩である。パスで多く使われているものは、ショルダーパスであるが、パスワークに使われるショルダーパスは完全なオーバースローではなく、手首だけで投げているショートパスであってシュートと使い分けている。その他ではラテラルパス（横パス）とバックパスが場面に応じて使われている。ラテラルパスというのは、ボールを上から握って腰の高さで投げる横パスであり、相手（防御プレーヤー）に正体して投げる。このパスは、攻撃的プレーに結びつけることができる。

私は以前からショルダーパス（オーバースロー）は、ステップシュートに直結させることを考えていたが、外人選手の多くはパス技術とシュート技術を使い分けているように感じた。というのは、攻撃中パスワークに使われているショートパスは手首だけで投げている場合が多く、ロングシューター（シュートする場合はステップよりジャンプが多い）が使うパスは、ボールを握って下から大きなバックスイングを活かしたシュートモーションパスである。このステップパスは3歩を最大限に活かし、シュートとパスの併用を狙ったプレーであり、ボールを握る外人特有の技術である。

キャッチについては、パスのスピードコントロールによってミスは殆んどなく、間々片手キャッチも巧みに行なわれていた。握ることがすべてであり「松ヤニ」などの使用によってキャッチングは完全な状態といえるようである。

(3) フェイントについて

フェイントの多くはシュートモーションフェイントであり、日本選手の使っているフットフェイントは、比較的小さいプレーヤーによって使われていた。ボールを自由に握れることが外人選手特有なシュートモーションフェイントとなっており、ボールを肩で止めながらプレーをする日本選手との相違がこのプレーである。

(4) シュートについて

ステップシュートはミドルシュートとして間々見られる程度であり、セットパスから防御の間隙を衝いてクイックモーションでシュートされている。このクイックシュートとは、セットでのパスワークからシュート体勢でボールを待ち、キャッチング即シュートというプレーである。ステップによるロングシュートは少なく、3歩の限界ステップがフェイントに切り替えられている。ステップによるロングシュートは寧ろ日本選手の方が多いように思う。

ジャンプシュートの特徴は滞空の長いことである。この特徴はボールを握るテクニックから導びかれているように思う。ボールを握り大きなバックスイングで振り回すようなモーションでシュートしている。

ポストから行なわれる倒れ込みと飛び込みシュートは、回転しないで着地する方法と、身体を前に伸ばして腕立伏臥から胸、腹などの支持によって着地する方法が見られ、日本選手が行なっている回転法もわずかに見られた。倒れ込みシュートは低い姿勢から前に伸びる方法で、相手の反則を誘い7mを得ようとするプレーでもある。

各種シュートはその場に応じて使われており、決して無駄打ちをせず、シュートは必ず得点に結びつけるという執念が感じとれる。したがって、無理な体勢では絶対にシュートをしない。無理な体勢でシュートをしないということはシュートをすればたとえシュートに反則的プレーがあっても、シューターがシュートすることを利としたと判定されているようである。このような判定基準が攻撃を慎重且執拗にさせており、シュー

トに全力を傾注するという執念を植えつけているのではないかと考える。この点の判定基準は日本の場合と全く違っており重要な問題であると思う。

2、チームプレーについて

速攻（ファーストブレイク）では、ゴールキーパーから、ルーズボールの処理から、その他のケースからの速攻は直線的であり、日本のくの字形速攻は全く見られない。したがって、中継を使った速攻は皆無といってよい。相手の不完全な防御隊形を突破する半速攻的なプレーは非常に少ない。この点は日本チームの特徴であり貴重な戦術であるといえよう。

遅攻（セットオフェンス）ではセットに組んでからの攻撃はパスアンドダッシュの基本プレーが忠実に行なわれており、攻撃の傾向は先頃来日したグンメルスバッハやスウェーデン男子チームに見られたゴール前を走り続ける攻撃によく似ている。またディフェンスの間隙を突破する突進力は果敢であり、このプレーが7mを誘うプレーとなっている。その他目についた点を挙げると、

① ポストプレーはどのチームでも主要な戦術であり、ロングシューターがポストを活かす縦のコンビがよい。

② セットを組んでからの攻撃は流動的でゴール前をよく走り、常に足が動いており、セットパスを攻撃的プレーにしている。

③ ブロックプレーはサイド、45度で使われており、ブロッカーの両手は背後で組まれている。

④ どのチームもいくつかのフォーメーションをもってはいるがそれを使って得点をすることは難しく、作戦的に阻止されていたように思う。結果は個人技を軸としたフリーオフェンスとの噛み合せのように見た。

次に防御についてみると、戦術としてのマンツーマンディフェンスは見られなかったが、ゾーンを主体として相手のエースをマンツーマンで守る複合ディフェンスは、勝つための手段として使われていた。マンツーマンが行なわれたのは、ゲーム終了前に挽回を策したときだけであり、日本でもよくとられる戦術である。

ゾーンディフェンスでは、フットワークのところで述べたように隊形は5・1防御と6・0防御のチームが多く、プレーヤーは各責任ゾーンをサイドステップを主体としてマークしており、この動きが一試合を通して続いている点に注目すべきであると思う。防御の特徴は攻撃の芽を早目に摘みとるというプレーが積極的であるという点である。

3、ゴールキーパーについて

ゴールキーパーはどのチームでも豊富な経験者であることが目につく。この豊富な経験がゲームのペースメーカーになっていることも見逃せない点である。しかし、ゴールキーパーの任務の一つであるボールの処理には素速さは見られず、速攻、半速攻で機先を制する日本的な戦術は少ない。ゴールキーパーからの速攻は、速攻で攻めきれると判断されたときに限られているように見た。

守備法で目についた点は、高いコーナーシュートに対して果敢なダイビングプレーが行なわれていることである。

構えは正面では両手が下がっているが、サイドでは上に挙げられている。

以上目についた点を綴ってみたが、日本選手の技術が世界で通用するか否かが問題となるが、今回の体験から日本選手のトップレベルの技術は、長身の外人選手に対して十分に通用するという自信を持つことができたと思う。

しかし、日本選手が外人選手に対抗し、好成績を得るには次のような点が強化されなければならないと思う。

① 個人技とスピードの養成
② 速攻体系の確立
③ ポストプレーの攻めと守りの習得
④ 防御のフットワークの完成
⑤ 身体機能の向上

などが重要なポイントではないかと思う。その上に選手一人一人が自分のためにハンドボールをやるという心構えと、進んで自分を鍛える努力をすることが大切なことではないかと思う。

（全日本コーチ）

日本は必ず優勝できる

井　薫

最初に此の度の世界選手権出場に際し、御声援、御激励、賜りました皆様、又数回の強化合宿を通じ、種々御世話になりました。各地の皆様に、精一杯やったのですが、御期待に添い得なかった事をこの紙面をお借りして、お詫び致します。そして今回の敗因をつぶさに検討して見まして、次の様な事から、近い将来、『日本は必ず

優勝出来る』と申せると思います。技術的な事を述べる前に『ナショナル・チーム』とは何なのかと云うものに就て、ふれてみたく思います。現在の日本の、殆んどの種目で、全日本、即『ナショナルチーム』と、表現していますがその内容は、学生、先生、会社員、自衛隊、等の各々の職場や、所属する学校の協力のもとに、練習を積み重ねた、アマチュア・スポーツの選手団（単独、選抜）である訳けですが、欧州、特に共産圏の各国を、目にした場合の、ナショナル、とは読んでの字の如く真に国家養成選手であり、つまりその競技に於ける、成績が、そのまま、自国に於ける、生徒の安定につながる性質のもので、一秒、一点、一つの演技、そう云った勝負のポイントが、生活につながる場合を、日本のそれと、御比較頂ければ、その相違点、御理解戴けると思いますし、私達の想像以上にスポーツ・マンの社会的地位が高い欧州各国の環境から育ったナショナル・プレイヤー、及ナショナル・チーム、の素質、頑張りは、大会の随所に見かけられました。更に一年でも永く、ナショナル・メンバーである事が、最上のものでありますから、日本の場合の様に、後進に道を譲る、と云った様な、きれい事で、自分から身を引く事等考えられず、如何にすれば、若い人と対等に力を発揮出来るのかと、自分なりに、研究、年令に応じた練習法で、自己を鍛える、ベテランの姿は実に、立派な事と思いました。日本の場合、現在では未だ、家庭とスポーツ（仕事）の両立は難しい、環境ですから、二十四、五を、ピークにその競技から、離れざるを得ない事情も、経験豊かな、プレイヤの育ちにくい、理由にあげられますが、せめて二回、或いは三回は、世界選手権を経験してると云った良い意味のベテラン、数名に将来性豊かな新人数名、そして最も動ける、中堅で、ナショナル・チームを編成出来たらと思います。更に日本の選手生活が短い事の一因に、練習法にも問題がある様に思います。つまり、現在の実業団チームを、例にとりましても、毎日三～五時間、殆んど年中、練習に明け暮れている訳で、割りと早く体力、気分の限界に、達しているのではないかと思われます。勿論、入念に計画された、選手育成であれば、完全な、食生活と休養で、それらの限界を、僅かに伸ばす事は考えられますが。この点、外国の選手は、シーズン・オフは他の球技や、陸上、水泳、等を通じ体力養成と巧緻性を初めとする機能開発を計り、シーズン・インの時期には、新鮮な気持ちで、ハンド・ボールと取り組む訳けで、その効果も高く、内容も重点的に行う為、短時間で目的を達して行く、と云った、スタイルが、比較的、息の永いプレイヤーを育てていると思はれます。日本のオールシーズン的、大会開催時期にも、問題はありますが、せめて練習内容は、もう一度真剣に、検討されて、合理性を求める事は出来ると思いますし、そう云った積み重ねは、日本の女子のレベルアップに役立つものに思えます。この様に同じ、ナショナル・チームとは申せ、日本と、外国のものでは、これだけの相違点がありますが、そう云った性格の相手と、対戦して技術的敗因の最たるものに、余りにも多くの7ｍスローを取られ、その殆んどが失点に結びついた事です。強引なポスト・プレイや、サイド・シュートに対して、防御が甘かった事は、事実ですが、大会前の十四戦の、国際ゲームを通じ、その対策は工夫しましたし、ルーマニアに於ては、監督のガブリエル氏からもその方法を教わりましたが、永年身についた防御法は、そう短期間には、スイッチできず、体格差を利用されての、ポストプレイに、振り廻された恰好でした。然しこの事も、日本人の体格にあった方法で、重点的に練習をすれば、解決出来る問題だと思いますし、対日本の場合が、体格差を考えてのポストの狙いばかりかと云いますと、そうではなくどの国のゲームも、何とかポストで、或いはサイドで、7ｍを、と云った戦法ばかりが、やけに目につきまして、そう云った意味では、余りにも単純な戦法に驚きました。優勝をしました東独にも、二つ、三つの組織的攻撃が見られましたが、これも実に単純なもので、一度はやられても、次にはもう完全に読みとれる、と云った程度のものであり日本の身上である素早い動きと、多彩な攻撃はむしろ外国勢に、強い印象を与え、世界の戦術の流れが、こう云った力にたよる傾向であれば、日本のチームが今後体格差をなんとか埋めて、パワー・アップして行く事で、その差は一気にとは申せなくても、ちぢまる事は十分考えられます。次にこれらの7ｍの判定を始め、ゲームに於てやはり日本の判定と、世界の判定との差は大きく、とまどった事が幾度もありました。ここで不思議に思われますのは、これ迄、男女合わせて、十回位いの欧州遠征にもかかわら

ず、この判定差が今もって、是正されていないと云う事です。待望のオリンピックも目前に迫っている現在、この事だけは、幸い先日来日したカールソン、オルソン、の国際審判員、更に、エミール、ホルン氏の来日の成果と共に、総ての審判部門、及技術部門の、これ迄の経験をもとに、何の不安もない状態で、ミュンヘンに送りだす事が、急務であろうし、この快挙を機に、これ迄の遠征チームが味わった、苦い経験も、姿を消すのではないかと思われますし、これが実現するであろう暁には、日本チームの実力も又アップするものと思われます。次に日本に於ける女子チームの数が少ない事が、頂点のナショナルを編成してみましても、層のうすい事に、つながると思はれます。若い中学生、高校生の皆様も、大学や実業団に、大いに進歩して、私達では果し得なかった夢の実現に努力される事を期待します。そう云った人が、一人でも増え、チームが一つでも増える事が、栄光につながるものと信じますし、常時三十名くらいのナショナル候補から、遠征人員に応じて、選ぶと云った方法でないと、前述の国家代表の選手権との争いには、余りにも微力すぎると思います。更にこれは経済的問題を無視しては語れませんが、理想とする遠征メンバーの構成は、プレイヤーは、せめて十六名〜十八名、役員も、団長、監督、コーチの外に、是非、必要と思はれますものに、チーム・ドクター、マネジャー（総ての経理面と、8㎜か16㎜を、自由に操作出来る立場の人）。さらに国際審判員のワンペア。以上、遠い欧州迄の経費を考えますと、実に多難な事とは思いますが、これだけの、スタッフと選手が理想ですし、敢て優勝と云う事を前提に述べてみました。そうして最後に、最も大切な事としまして、ナショナル（全日本）は、何か事ある度に、編成されるべき、性格のものでは決してなく、そのメンバー、スタッフに、変動はあれ、目的達成の為に、充分、検討されたレールを、毎年走りつづけるものでないと、その効果は望めないと云う事です。そして多くの先輩方の意見を参考に、更に新らしい外国の、動きを敏感に、キャッチし乍ら、トレーニングを積み重ねる姿こそ、真の日本流に於ての、ナショナルと呼べると思います。昨年の十二月、オランダに於て、優勝しました東独を初め、もう三年後の世界選手権えの準備は、世界のあちこちで、始まっていると云っても、過言ではないと思います。長々と述べてみましたが、あらゆる改善を、技術の日々の進歩と、並行に計って進みますと、ごく近い将来、「日本は必ず優勝出来る」と云う結論に達すると確信致します。尚、私達選手団が遠征を通して得ましたものは、出来得る限り、多くの皆様に御伝え致す事が、使命でもあると心得えます。最後にミュンヘンの成功を祈ると共に、今後とも女子ハンドボールも、宜敷く、御育て下さる様、御願い致します。

（全日本コーチ）

世界選手権の印象

枝尾　清女

実に長かった遠征を終り、今ふりかえって見ると『終ったのだー』と、いう安堵感と『なにか物足りない…』と、いったような気持ちが入り組んでいる。世界選手権を通して、勝利への執念と体力の発揮、スピードを生かしたプレー、防禦技術等々、色んな国のプレーに接し、大いに参考になり学べたと思って。各国での親善試合を終え、最大の目的地オランダに、十二月一日に着き、パーペンダルスポーツホールで、二日から十日迄日本で合宿した時と同じスケジュールで、本大会に備えての体力の強化、防禦、フリーフォーメイションでの早い動き、といった練習をする。

十二月十一日、第一戦対西ドイツ、相手は、スローオフと同時にマンツーマンの防禦をしてくる。自分達のペースがくずれ、前半は五対四で相手のリードで終了、後半に追い込みはするが、ディフェンスの甘さから幾度も相手のポストプレーヤーに点を許し、各自の持味を発揮でもないままにゲームを終ってしまう。

十二月十二日、第二戦対デンマーク、このゲームも西ドイツと同じ作戦でマンツーマンをしてくる。五〇分間一度もリードできずに、試合終了…ついに決勝リーグ進出ならず―順位決定を残して十五日、十八日の後半戦だ。

十二月十五日、順位決定対ノルウェー戦、相手の二番にマンツーマンの防禦をする。立ち上り先攻ゲームのペースをにぎるかに見えたが、マンツーマンしている相手に点を許してしまう。後半は、日本の方に退場者があったにもかかわらず失点をくいとめ、やっと引き分けになり、少しは落着いたが勝負の世界の厳しさを今さらながら痛感するものである。

十二月十八日、順位決定対オランダ戦、実力を発揮できないまま

に、勝たねばならないゲームをおとしてしまった。

背の低い私達が、外人と対抗する為には、素早いフットワークで常に動いていなければならないことを痛感した。

又、私達と違うことは、ボールをパスしてからの走りはすごく、スピードがありその走りは、フェイントをかけて走るので、守りずらいものだった。

この遠征で、覚えたこと、身につけたことを、日本ハンドボール界の発展の為に、役立てたいと思っている。

防禦面に反省残す

古佐原ひろ子

選手権前、一ケ月以上のヨーロッパ遠征をし、今まで外国選手に対し、コンプレクスを感じていましたが、数回の練習マッチをして全然コンプレクスを感じなくなりハードスケジュールの中で、十二勝二敗と好成績、世界選手権でも六位には、確実に入ると思いましたが、一勝も、勝つことが出来ず世界選手権の厳しさが、身をもって感じられました。日本は、技術的には、世界の見本とはなっても、劣ることはないです。世界選手権出発前から、口癖の様に言われていた精神面が、もう少し足りなかった様に思いました。上位入賞は皆共産圏。共産国の、試合に対し勝つための斗志、根性と言ったものには、すさまじい強さが感じられました。又、キャリアの点でも、日本ではとても考えられない位です。片言で、各国の選手達と話しに花を咲かせ聞いて見ると、ママさんプレィヤーで、子供が何人いるなど聞いてびっくりするだけ、ヨーロッパの方は、それがあたりまえの様です。そのベテランプレィヤーに、若手のプレィヤーが上手にかみ合わさっている。経験抱負な点から、ゲームに対してかけ引きがうまい、スタミナの点でも驚くばかり、日本は、毎日毎日の練習をつみ重ね、始めて成果が表われるのに、話によると、週何回かで、短い時間の練習、試合には、あの豪快なシュートを、たたき込む、速攻も出る、わずかな時間での練習とは思えない位です。又、どの国も、ポストプレーを使う、ボールを保持する時間が長く、わずかなすきにポストに入れる。ポストプレィヤーは、男子のポストプレィヤーの体勢を作るので、ボールが通ったらかならずと言って良い位、7メートル、日本も、半分以上は、7メートルをとられてしまう。7メートルを取られるのは、ディフェンスに、大きな鍵がある様に用いました。今日本のナショナルの男子が盛んにやっている、フットワーク、向こうでも、たえずサイドステップでのフットワークで、相手をマークしている。オフェンスよりも動いていました。日本は反対で、オフェンスには力を入れるが、ディフェンスで力を休ませてしまう傾向がある。それから、ボールを持たない相手に対して、かならず、ホディチェックし、攻撃力からはずす。フォーメイションの時、エリアからきりくずす相手の腕を握り離さないと言った例がありました。未熟だった私が、世界選手権に出場し、世界の人達と話し、又世界のベテラン選手のプレーを見て来て大変勉強になりました。これからも経験をいかし、頑張りたいと思います。

ヨーロッパのGKの印象

小原　名苗

57日間のヨーロッパ遠征を終え初めてヨーロッパのGKと接し、私の見た限りでは体格差はフィルドプレーヤー程なかったように思いますが、試合に対する執念や又試合の駆引きには、そのうまさに感心させられました。こんな事がありました。東独ユーゴの優勝戦で東独が7mをとられ、東独の若いGKはコースに動いていたけど手にあたってはいってしまった。その時入れられたコースをじっとみつめ今度はぜったいとるんだという態度を示し、一本の7mに対しても勝たなければという執念とチーム内に於けるGKの立場の厳しさを攻めて考えさせられました。東独のGKと逆にユーゴのGKは30才近いベテランで、国際経験も多く、試合の駆引きは更にうまく、よくゲームを把握し、勝ってる時と負けてる時の状況を考えシュートをとめてからボール出しまでの間に駆引きをうまくやり、又審判に注意されない程度に動作も考えてやっていると思いました。GKの動作や処置でずいぶんゲーム展開も違ってくるものだし常にフォワードをリードしてるように思いました。ユーゴと三回程練習試合をやって、私達はゲーム前に一時間アップをしてゲームにのぞむのに、ユーゴの人達は10分間位、各自で動き、ゲームになったら最高の力を発揮していました。GKも一人でいろいろな動きをやって、自分でどれだけアップをしたらゲームをベストで動けるかという事をよく知ってる様に思

☆ 女子欧州レポート

いました。これはヨーロッパのすべてのプレーヤーに言える事で、私達も短かいアップでゲームに対しての技術的津備はもちろん、勝利に対してのはげしい気力を出せるようにしたいと思いました。日本のこれまでのアップは、たっぷり時間をかけていましたが、これも日頃の練習内容からきてるもので、もっと重点的なものにきりかえる必要性を感じましたし、日本のトレーニングはコーチの指示で全面的に、従って消化しますが、今後は自分で、積極的なアップが必要な事も痛感しました。しかしボールさばきを初め、GKとしてボールさばき以上に必要と云われる速攻に対してのボール出し等、GKの技術は、日本も劣りません。ヨーロッパのGKの構えは、ほとんど型にはまらず、もっとも動きやすく、しかもシューターに対しては、大きく自分をみせるスタイルで、ポジションもゴールライン近くまで下がったり、シューターの角度に応じての変化など巧みな事を感じました。けして派手さはないが、確実にボール処理に徹していて、ボールを受ける時は、体全体を使って、その処理にあたり、日本の場合のように軽く片腕のみといった事で外人は特有の、重いボールは防げず、GKの基本であるボールは、正面でという事を再認識しました。速いパス速いシュートに対し、常に良い位置を占められる読み、そして身のこなし、これは日頃の練習の積み重ねから、出来るものであると思いました。しかし、弱点もみられました。ダイレクトシュートに対しては強い反面、ゴール前で、バウンドするシュートには弱いように思いました。日本のシュートが決まったのも、クイックやタイミングをはずしたシュート、バックをかわしたシュートには、比較的もろいと思いました。しかし小さい時からハンドボールと並んでサッカーや他の球技に親しんでいるせいか、瞬間的に足が出ていました。日本のGKの足さばきは、どうしてもぎこちなく、動作が非常に悪いものですが、その点ヨーロッパのGKは足の動きがボールに対して早く、確実にボールにあて、殺しているのに感心しました。今度のヨーロッパ遠征で痛感したのは、年令に関係なく各自の練習法で幾つになっても、できる事、特にルーマニアのGKの34才そのプレーは年令を感じさせず、練習も先頭に立ってやってる事は私達の良い励みになりました。これまでの事を総合しますと、GKだからゴールの中だけの練習に終始すれば、よいと云った考えを、もっとFPに近い動きをしたり、これまで以上に、瞬発力養成の必要性も感じました。又ほとんど、FPがボールを握ってフェントやシュートをして来ますので、早く動きすぎない様思いきり呼び込んでボールに向う事、「この際以前の11人制のGKが行っていたと云はれる、全身を使って飛び込む防禦法」もこれまでの方法と一諸に練習して、いくべきだと思いました。

初めて本場の技術に接して

三宅美智子

長い手足、均整のとれた体格…試合に臨む以前に外人チームを見て一沫の不安が胸をよぎる。しかし〝ピーッ〟というスロー・オフの笛の音と同時にそんな不安は消えてしまい〝何が何でもやらなければならない〟という使命感だけを背おってルールのある戦いにいどむ。

十一月三日のデンマーク戦を皮切りに十二月十八日のオランダ戦が終る迄、二十試合余りを通してこれといって目に新しいプレイは見られなかったけれども、共産国の人達は特に個性がはっきりしている感じがした。フリースローラインの上附近からの男子並のジャンプシュート…キック力、バネの素晴らしさに驚くばかりだった。ボールを完全に握っていてバックを前にジャンプする訳だけれどもそのジャンプが空間で一呼吸おく位の感じだものだからバックがタイミングを合わせてジャンプし、ボールカットをしようと思ってもおりた時にその頭の上から強烈なシュートを打ちこまれるということがあった。それに、ユーゴの選手の中にサイド（左）シューターで、ボールを完全に握りそのボールを自分の頭の後に一度かくし、ライン内にとびこんでから打ち分けるプレイヤーがいたけれども十八才という若さでその特技を自分のものにしナショナルプレイヤーとしてのプライドをもち、持ち味を生かしていることに層の厚さを痛感させられた。そのプレイヤーは、得点しない時は、7mというケースになりうる動きをやってるのでサイドのディフェンスの者が完全にマークしていなければならず、しぜん全体が広くなるディフェンスにさせられていた。武者修業前半の頃は、ポストの守りがどうしてもあまく7mをすごくとられた。体格がひとまわりは違う相

手だしその体重にふりきられ強引にずらされ、しかも間を割られて結果的には後からおっかけ腕をひっかけるということになり7mはまぬがれなかった。一試合の失点の半数以上が7mということが多くポストでのディフェンスが中心となり7mをくいとめれば失点が少なくなるというのでまずはポストプレーヤーと一緒にラインの中へ倒れこむことを指示された。ルーマニアのコーチからはフルバックの人がポストプレーヤーを自分の背後におきその位置を常に知りながら万が一ボールが通された時はライン内へ押し込むよう指示されポストの動きを封じるべく練習を重ねたものの、あらためて体格差からくるハンディを感じさせられた。しかし、審判の判定基準の相違に悩まされながらも試合をつむにつれて7mの数が少なくなったことは、単に本場のプレイに馴れたというだけでなく少しなりともデフェンス技術が上向きになったことがいえるのではないだろうか。公式戦においては、攻防における駆け引きのうまさに驚くことが多かった。ハンドボールを知ってると一言でいってしまえばそれで終りだけれど、審判へのアピール、時間経過による巧みな7mにするべきねじこみ方……勝つことに徹してプレイする国家意識の強烈さ等々。そして又、それに輪をかけたようなキーパーのボールさばきのうまさも知り長い間の選手生活において自らつくり上げていったのであろうことを感じさせられた。攻めにおいては、各人が完全にボールを握れることもあり、ボールテクニックがすごくうまくそれを利用し大きいモーションからのフェイントプレイが随所に見られた。男子並のジャンプを放つ人が三人程見られ、それぞれ個性にあふれたプレイを自信もってやっていた。各人で常に足を動かしていることも大きな特徴といえるようだ。一つ一つのパスにスピードがある訳ではないけれども、個々の足が動いておりパス and ダッシュの基本プレイが連続して行なわれる。防禦も同じことだけれど、実にフットワークがいい。忠実にサイドステップをつかい手でボールのコースをおっている。しかし、日本特有のモーションの早いアンダーやステップシュートが何本も決っているから手放しで、賞讃するほどのことはないようだ。これからの私達は、筋力の向上に努めフットワーク等の基本プレイの連続動作を続行させるべき体力の向上につとめなければ、ならないように思った。

全日本女子遠征成績

▼世界選手権

▽予選A組

日本 7（3―5、4―5）10 西独

日本 7（3―7、4―4）11 デンマーク

▽7位決定リーグ

日本 12（6―5、6―7）12 ノルウェー

日本 11（2―7、9―6）13 オランダ

1分3敗の成績で9位

▼親善試合

日本 14（9―6、5―6）12 デンマークナショナル

日本 19（7―3、12―7）10 フンダクラブ（デンマーク）

日本 15（8―4、7―7）11 ボーレンゲクラブ（スウェーデン）

日本 20（10―8、10―3）11 ストックホルム（スウェーデン）

日本 14（7―7、7―11）18 ブカレスト大（ルーマニア

日本 12（5―9、7―9）18 ルーマニアナショナル

日本 13（6―7、7―6）13 ルーマニアナショナル

日本 26（12―5、14―3）8 アクイタイヌ（フランス）

日本 30（14―0、16―3）3 アングレーム（フランス）

日本 15（8―4、7―9）13 フランスナショナル

日本 13（6―4、7―3）7 フランスナショナル

日本 9（6―4、3―3）7 ハンブルグ選抜（西独）

日本 18（11―5、7―8）13 ニーダーライン（西独）

日本 16（10―0、6―7）7 アイントラハト（西独）

日本 18（10―8、8―2）10 ベルリン選抜（西独）

15戦12勝2敗1分

ジュニアナショナル編成へ

技術指導部（部長・勝常務理事）は1月22日全国委員会を開き主として47年度事業について協議したが、懸案の「ジュニアナショナル」の編成を具体化、今夏8月の第23回全日本高校選手権終了後、高校優秀選手に選出された男女各20名を対象に強化合宿を行えるよう高体連関係者と打合せることに決めた。



'71

東海、関西に雪じょく

2地域学連対抗戦

第2回関西―東海学連2地域選抜対抗戦は1月14日大阪市中央体育館で行われ、攻守にまとまりをみせた東海学連が後半一気に加点昨年の雪じょくを遂げた。

東海学生選抜 18（7－5 11－6）11 関西学生選抜

得	【関西選抜】	
0	森友（大経大）	GK
0	片岡（立命館）	GK
3	川上（関学大）	
0	橋本（大経大）	
2	富永（関学大）	
2	宮松（関大）	
0	山口（桃山大）	
2	中野（追手門大）	
0	田内（追手門大）	
0	真継（京大）	
1	福井（京産大）	
1	牧野（同志社）	
11	（0）	

得	【東海選抜】	
0	竹内（名城大）	GK
0	福井（中京大）	GK
0	坂部（名工大）	GK
3	長縄（中京大）	FP
1	桑島（名城大）	FP
1	飼沼（名城大）	FP
1	福田（名城大）	FP
1	工藤（岐阜大）	FP
2	夏目（中京大）	FP
5	成田（中京大）	FP
4	小川（中京大）	FP
0	梶村（中京大）	FP
18	（1）	7MT

（審・橋谷、椿谷）

会長・理事長ら留任

全日本実連

全日本実連は2月7日理事会を開き47年度役員を決定した。

▽会長　林達夫▽副会長　渡辺和美、平出一▽理事長　田中滋章（タヨシ産業）▽副理事長　岡部正文▽常務理事　山田稔、横地宇吉、富永劭、永井正美、近藤金博（新任・東京重機）▽理事　泉芷明、松岡富夫、井薫、田中登司治、竹野奉昭、池田鉄哉、村中明朗、西本利治、田口侑義（新任・東北ムネカタ）▽監査　太田耕治、西村亮治

学生界の"復興"を信ず

飯田保夫

ミュンヘン・オリンピック出場、というすばらしいできごとがあった一方、日本ハンドボール界の主流たる学生界の低調は、極言すれば昨シーズンの明と暗ともみれるだろう。

機関誌"ハンドボール"12月号のインカレ総評を読みながら学生界で現役プレイヤーと活動する一人として誠に恥ずかしい思いを強く感じこの筆をとることになりました。

私の属する立命館大学は関西学連発足当時からの加盟校、常勝関学にこそ遅れはとっていたが、いわゆる伝統校の一角として日本の学生界でも屈指の古豪である。特にスケールの大きな攻守、若さにあふれた"立命ファイト"を定評にして活躍して来たが、昭和31年のセレクション（優秀高校選手の選考推せん）システムの廃止後、一時的には好成績をおさめるシーズンもあったが目にみえて力が落ち最近ではまったく往年の面影のうすれた存在となってしまった。

そして本年度はついに3部まで転落し新シーズンを迎えなければならない。

原因は多々存在しているが、やはり部員難を第一あげねばならないのが現状だ。私が昭和43年に入学して以来、紅白試合や6―6など夢物語で、試合への7人を確保するのが精一杯。

日本ハンドボール協会も、底辺拡大の方にいよいよ本腰をいれられると聞いたが、これによって、小・中学生、高校生たちに真の大学体育会のあり方をも大いに紹介し、同好会という、ともすれば単なる遊びに終ってしまう流れを、何とかくいとめられるのではないかと大きな希望がかけられる。

日本協会をはじめとするすべてのハンドボール関係者による底辺拡大策が、実を結ぶとき、部員難に脳む全国大学をはじめ、立命館大学もきっとかっての関西のダークホース存在をとり戻してくれることと思う。

東京においても、伝統校の早大慶応・明大などは、振わないと聞いている。

正月の大学ラグビー戦での、あの秩父宮ラグビー場を満員にさせたものは、やはり早大や明大など伝統校の活躍が大きなウェートを占めていると思う。

ミュンヘンへの出場、底辺拡大これによってかって本学対明大定期戦など東西交流戦に多くの観衆を集めた大学ハンドボールの人気復活―あと5年すれば現実の姿となることを私は確信している。

転落した古豪校の悲哀を私の学生時代の思い出として、全く失意のうちに学窓を去らんとする私にとって、願いは、ただ関西球界でのダークホース的存在の復活それのみである。

3部に転落した時、頭が青くなるほどのツルツルの坊主頭になり、くやし涙に一日中、眠れなったあの時の自分の姿が、本当の楽しい思い出として後輩に語れる時が、一日でも早く訪れることが、私の現在の心境です。

伝統ある学生界の"復興"を信じるとともにミュンヘンでの日本の大活躍を願い全日本チーム関係者諸先輩、協会、諸先輩の御健勝を心から御祈り申し上げます。

（投稿・立命館大4年）

ハンドボール指導テキスト草案(1)

日本協会普及部編

ハンドボール競技の概念

近年ハンドボール競技は教育的価値及び特性等から重要視されつつある。

この競技についてはヨーロッパ大陸で多くの競技人口を持っているものと、アメリカ大陸で行なわれているものと2種類あり両者はその競技の形態及び内容などまったく質を異にするものである。

ここにその概念としてとりあげるハンドボールはヨーロッパを中心としたものを指し、ドイツ、チェコ、ルーマニアをはじめ多くの国々で行なわれているものである

彼の地ではサッカー、陸上競技体操等に優るとも劣らない人口を持ちスポーツ的地位を保持している競技である。また、ヨーロッパで行なわれているこの競技は11人制のものと7人制のものとがある

かって日本でも11人制を中心として来たのであるが、現在は7人制一本にしぼっているので、日本でハンドボールと云えば7人制ハンドボールを指すことになる。

7人制ハンドボールは縦40m、横20mのコートで1名のゴールキーパー(GK)と6名のフィールドプレイヤー(FP)からなり、ボールの大きさは大人の手で容易に握れるくらいであるが、重さはボールの大きさに比べてかなり重量がある。

ハンドボールの名の示すとおり総てのプレーヤーは手でボールを操作しなくてはならない(GKだけはボールの進行に対して足を使用することが許される)。そのプレーは3歩以内のボール保持、3秒以内の同一地点上のボール保持が許され、そのルールに従って相手側のゴールに投げ入れることを競うものである。

得点はゴールポスト内(高さ2m、巾3m)を完全に通過したものをすべて1点とし、得点の多いチームを勝ちとする競技である。

〔イ〕ハンドボールは誰にでもできる……。

この競技は規則が割合に簡単でゲームを行うのが容易であるため老幼男女、年令を問わず誰でもできる球技の代表的なスポーツということができる。何故ならば我々の日常生活に使いなれている走・跳・投の要素がほとんどであり、新しいドリルを必要としないからである。そして適材適所その人に応じたゲーム役目をもって行うことができる競技だからである。

〔ロ〕スピーディなゲームである

現代の社会はスピードの社会であり我々の生活の新しい傾向としてそれが要求されるようになってきた。

ハンドボールはその要求にマッチした数ある団体球技のうち最もスピードのあるスポーツの部類に属し、ことに7人制ゲームになってからはなおいっそうその感が深い。

それはボールが割合に重いこと而も片手で握れる程度の小さいボールであり、競技場そのものも手ごろの広さのためチャンスを逃さず攻撃しないと得点に結びつかない為である。従って攻める時も又守る時に於てもスピードが必要である為にゲームはいきおいスピーディにならざるを得ないのである

〔ハ〕やって面白く、見て面白い競技である

スポーツは種目に関係なく、行うことが第一の目的である。

而し現社会に於ては見て面白いということも大切な要素である。

見て面白いという条件は種々とりあげられるがハンドボールの面白さは第一にスピーディであること。第二にゴールエリア近くに於ける必死の攻防にスリルがあること。第三にシュートがダイナミックであること、などがあげられる

このゲームを通じての一連の動作は力と技術と人間性の結合であり、その他に走・跳・投の自然動作の組み合せによる間(ま)の連続動作である。このことが見る者に「面白い!!」と感じさせるのである。

〔ニ〕ハンドボールはスピーディなゲームである為、短時間でも体育的効果をあげることができる

①走ることが中心になるために運動量が大きく強い運動ではあるが、反面ゲーム中の交代が自由であるから体力に応じてその調節ができる。

②一度に多人数が楽しめる団体ゲームである。即ちゲームは12名(一度に7名でプレーをし、他は交替メンバー)で行うが、学校の授業等では人数制限にこだわる必要もないからその取り扱いが容易である。

〔ホ〕基礎体力の養成に適している

人間発生とともに外敵より身を

守り、衣食住の必要を満たすために必要とした走・跳・投は現在になっても生活の要素の一つであることに何等の変はなく、そのためことさらに基礎体力云々が叫ばれているのである。

走ること、投げることそして跳ぶことは以上の観点から欠くことのできないものであるがハンドボールにおいてはゲームを行なうことが基礎体力の養成になっている

走……ハンドボールは走ることの連続でことに攻撃には走るスピードが必要である。またゲームは担当長い時間かかるからその攻防とも走る耐久力の養成になっている。

投……片手で握れる程度のボールであるため、当然肩からのパスが多く使われる。従ってゲームはボールを投げることの連続であるといっても過言ではない。

またシュートは得点を可能にするため、当然スピードが要求され投げる力も強力でなくては役に立たない。

跳……ジャンプシュートの巧力が勝敗に強く影響するし、エリアサイドよりジャンプパスをしてポストプレー、スカイプレーと数えあげれば枚挙にいとまがない。従って勝利を得るためには是が非でも各種ジャンプをマスターをしなければならない。

ハンドボールの歩み

ハンドボールはいつ頃どこで始められたものか――ハンドボールは一九一五年(大正4年)トーアバル～門球～という名称でドイツで始められている。

サッカー、ラグビーのように広いグランドで行なえる女子のスポーツとして誕生したがルールを制定して技術が進歩向上するにつれて男子も行うようになり、一九二〇年(大正9年)アソシエーションフットボール～サッカー～に対してハンドボールと呼ばれるようになった。

ハンドボールは誰によって作られ発展したものか――現在行なわれているハンドボール(7人制)はドイツのカール・シュレンツ氏によって正式なルールが制定されたハンドボール(11人制)が前身となっている。その後の国際的な発展を記すと

▽一九二〇年　ルール制定
▽一九二一年　第1回全ドイツ選手権大会開く
▽一九二八年　国際アマチュアハンドボール連盟(IAHF)創立
▽一九三四年　室内ハンドボールルール承認
▽一九三六年　第11回オリンピック大会(ベルリン)に正式種目として採用される
▽一九四五年　国際ハンドボール連盟(IHF)に改組
▽一九五二年　第15回オリンピック大会(ヘルシンキ)に公開種目として行なわれた。

以降他のスポーツに伍して着々発展し、昭和46年10月現在では国際ハンドボール連盟(IHF)加盟国は49ケ国となっている。

日本国内のハンドボールの発展状況――日本のハンドボールは一九二二年(大正11年)大谷武一氏によって伝えられたのがその始めである。

▽一九二二年　大谷武一氏よりハンドボールを紹介する
▽一九二六年　学校体操教授要目に新教材として採用される
▽一九三七年　日本陸上競技連盟にハンドボール専門委員会設置
▽一九三七年　第1回関東選手権(東京)開く
▽一九三七年　第9回明治神宮体育大会に陸上競技の一部として行なわれ、これを第1回全日本選手権とした。
▽一九三八年　ドイツ・ヒットラーユーゲント団員との間に日本初の国際試合が行なわれた

このように着々と発展してきたハンドボールも他のスポーツ同よう第2次世界大戦によって中断された。

▽一九四六年　復活東西対抗戦開く(西宮)
▽一九四九年　東京駒沢にハンドボール専用グランド設置
▽一九五四年　第1回全日本総合室内選手権開く(大阪)
▽一九五六年　西ドイツと戦後初めての国際試合を行ない、以降世界の強豪チームを招待。
▽一九五七年　女子及び中学男女の競技を7人制一本化
▽一九六一年　第4回世界男子7人制選手権大会に初出場
▽一九六二年　国内競技はすべて11人制から7人制に切りかえ。

東京オリンピック(一九六四)大会には正式種目として参加できなかったが、7人制に切り換えられたことにより、よりいっそうハンドボールの特徴を活かすことができ名実ともに一本立した独自のスポーツ〝ハンドボール〟となった。

そしてミュンヘン・オリンピック(一九七二)には正式種目となるに及んでその地位はいっそう高められるものと信ずる。

ハンドボールの教育的価値

〔1〕学校体育としてのハンドボール

走・跳・投という身体活動の基本運動がよりよく活用されるハンドボールは精神的発達とあいまって学校体育の目的を達成するための一教材として十分な要素を備え事実行うにあたってはコートの大きさによりチーム構成員の増減もできるし、比較的運動量の多いスポーツでありゲームを楽しむのに高度のスキルを要しないで走跳投の運動能力をより訓練できる等の諸点を総合して体育教材として格好な種目であるといえる。

加えて精神的には団体競技としての協力・融和・責任・忍耐など人間関係から生まれ出る競技精神をつちかうことができる。

また、公教育にハンドボールがとりあげられたという点より考えれば公教育とは義務教育のことであるから、日本国民すべてがその教育を受けるわけである。ハンドボール競技は「必修選択」であるとはいうものの、ハンドボールを学習する機会をもったことには変りない。

その狙いとしての運動技術内容種目のもつ競争や協同についての態度や行動のしかた、公正・責任についての態度や行動などそのつちかわれる内容と共に非常に意義深いものがある。そして上は一般下は小学生まで、まして正課体育として行うハンドボールは高度な技術がなくてもそれなりにゲームを通して十分楽しめるものであり而も技術的には短期間中にゲームに必要とされるものを相当高いレベルまで進歩させることができる

このような点から小・中学校をはじめ学校体育にとって身心両面の向上に欠かせない教材の一つで

あるということがいえる。そして中学校指導要領に組みこまれたことは小学校体育との関連に於いてまた高等学校体育に組みこまれたことは大学の、そして一般の社会体育の面に至る関連性に意を用いなければならぬことを示していよう。

〔2〕 発育段階とハンドボール

別掲の6表は昭和43年度日本ハンドボール協会技術資料調査専門委員会が全国各都道府県チームの資料提出に基き作成したもので、内訳は一般男子6、同女子5、大学男子20、同女子4、高校男子20同女子26、中学男子5、同女子4チームである。

また測定項目は次のとおりである（注・測定項目に問題を残してはいるが最初の測定でもありすべてを記載する。

測定項目（12項目）

A・形態＝身長、体重、胸囲上腕囲、前腕囲、大腿囲、下腿囲

B・機能＝筋力（握力、背筋力）、パワー（サージャントジャンプ、遠投、立ち三回とび）、敏捷性（9m往復走、20m疾走、ローリング）、持久性（H・S・T）、腕立て伏せ、臥腕屈伸）、柔軟性（体前屈度、上体そらし）

以上の12項目を文部省全国平均と比較すると

A 形態（第1表参照）

全国平均より総体的に優れていることが判る。特に中学男子においては身長10cm以上、体重7・5kg胸囲4・4cmと著しく優れている。それに比して高校男子では大きな差を見ることができず、むしろ大学男子の方が優っている項目の多いことが判る。一般男子では大学男子より身長、体重、胸囲で僅かではあるが劣っている。発達段階で男女とも中学から高校間で著しい発育発達が示されているが高校から大学ではほとんど発達がみられなくなり、大学から一般では全く発育発達の停滞があらわれている。

また、中学男子で前腕囲が上腕囲より僅かであるが発育発達しているのがみられるのは身体の発育段階を促していることがうかがわれる。

B 機能Ⅰ（第2表参照）

第2表は機能面の筋力と敏捷性についての結果である。

これを全国平均値（文部省体育局昭和43年3月発表の体力運動能力調査報告書資料）と比較してみた。ここでは筋力しか比較できない。但し握力の平均値は全国は左右の値を加え平均したものであるので同様の方法で比較検討してみることとする。敏捷性テストは同

第1表 形 態

		中学男子			中学女子			高校男子			高校女子		
		ハンドボール		全国平均	ハンドボール		全国平均	ハンドボール		全国平均	ハンドボール		全国平均
		X̄	SD		X̄	SD		X̄	SD		X̄	SD	
身長 cm		163.0	±8.0	152.9	154.2	±5.1	150.6	168.1	±5.5	166.0	157.1	±4.4	155.1
体重 kg		50.4	±8.2	42.9	46.9	±6.6	43.2	57.9	±5.3	55.7	53.5	±4.6	50.3
胸囲 cm		78.7	±5.8	74.3	76.7	±4.3	74.8	85.9	±3.8	83.9	82.3	±5.9	80.5
上腕囲 cm	右	23.3	±2.6	—	22.3	±1.9	—	25.9	±1.3	—	25.0	±3.8	—
	左	23.1	±2.7	—	21.9	±1.7	—	24.9	±1.8	—	24.4	±2.1	—
前腕囲 cm	右	23.8	±2.7	—	21.6	±1.2	—	25.6	±2.0	—	23.1	±1.4	—
	左	23.3	±2.7	—	21.3	±1.2	—	24.9	±1.8	—	22.6	±1.4	—
大腿囲 cm	右	47.0	±4.6	—	49.0	±3.9	—	51.1	±2.7	—	52.2	±3.3	—
	左	46.8	±4.4	—	49.1	±3.6	—	50.9	±3.0	—	52.3	±3.3	—
下腿囲 cm	右	34.4	±3.6	—	33.4	±2.6	—	36.1	±1.8	—	35.4	±2.1	—
	左	34.5	±3.6	—	33.6	±2.6	—	36.3	±2.1	—	37.3	±2.2	—

		大学男子			大学女子			一般男子			一般女子		
		ハンドボール		全国平均	ハンドボール		全国平均	ハンドボール		全国平均	ハンドボール		全国平均
		X̄	SD		X̄	SD		X̄	SD		X̄	SD	
身長 cm		171.3	±5.4	168.3	158.2	±4.6	155.7	169.4	±5.4	—	157.9	±5.9	—
体重 kg		63.0	±5.6	58.2	54.5	±4.8	50.7	62.5	±4.9	—	55.0	±4.6	—
胸囲 cm		90.0	±4.3	85.9	82.6	±2.9	80.4	88.8	±3.9	—	83.5	±3.0	—
上腕囲 cm	右	26.7	±2.2	—	24.7	±1.7	—	26.7	±1.9	—	25.5	±2.1	—
	左	26.2	±2.2	—	24.1	±1.5	—	26.3	±1.8	—	24.6	±2.2	—
前腕囲 cm	右	26.0	±1.6	—	23.2	±1.2	—	26.7	±1.8	—	23.4	±1.3	—
	左	25.4	±1.5	—	22.5	±1.2	—	26.2	±1.7	—	22.7	±1.2	—
大腿囲 cm	右	51.9	±2.9	—	52.8	±2.8	—	52.0	±2.9	—	53.8	±2.7	—
	左	51.9	±3.0	—	52.4	±2.6	—	51.9	±2.8	—	53.6	±2.7	—
下腿囲 cm	右	36.5	±2.3	—	36.2	±1.3	—	36.5	±2.0	—	36.3	±2.1	—
	左	36.6	±2.3	—	36.2	±1.6	—	36.7	±1.9	—	36.2	±2.0	—

第2表　機　能（1）

		中学男子 ハンドボール			中学女子 ハンドボール			高校男子 ハンドボール			高校女子 ハンドボール		
		$\bar{X}$	SD	全国平均	$\bar{X}$	SD	全国平均	$\bar{X}$	SD	全国平均	$\bar{X}$	SD	全国平均
背筋力 kg		117.1	±22.8	98.3	91.6	±20.8	69.9	150.3	±22.4	135.2	107.2	±19.9	82.5
握力 kg	右	33.0	± 8.6	28.7	23.3	± 7.0	23.6	45.6	± 7.2	42.2	31.0	± 4.7	28.3
	左	30.2	± 8.4		21.9	± 4.3		41.7	± 5.6		31.3	± 4.7	
20m走 sec		3.42	± 0.3	—	3.56	± 0.32	—	3.35	± 0.23	—	3.68	± 0.24	—
9m3往復 sec		15.1	± 0.98	—	16.6	± 0.77	—	14.9	± 0.73	—	15.9	± 0.9	—
5回連続ローリング sec		5.56	± 0.87	—	5.84	±1.23	—	5.31	± 0.69	—	5.76	± 0.88	—

		大学男子 ハンドボール			大学女子 ハンドボール			一般男子 ハンドボール			一般女子 ハンドボール		
		$\bar{X}$	SD	全国平均	$\bar{X}$	SD	全国平均	$\bar{X}$	SD	全国平均	$\bar{X}$	SD	全国平均
背筋力 kg		149.2	±32.7	138.6	119.4	±18.2	82.6	152.1	±22.2	—	122.1	±21.4	—
握力 kg	右	49.6	± 7.4	44.8	32.1	± 6.2	28.5	55.5	± 8.2	—	32.5	± 6.7	—
	左	45.7	± 7.2		29.8	± 5.3		51.2	± 7.9	—	28.5	± 8.0	—
20m走 sec		3.24	± 0.3	—	3.55	±0.27	—	3.26	±	—	3.49	±	—
9m3往復 sec		14.6	± 1.03	—	15.8	±0.9	—	14.7	± 1.55	—	15.6	± 0.75	—
5回連続ローリング sec		5.61	± 0.89	—	5.32	±0.64	—	5.66	±0.66	—	5.73	± 1.17	—

第3表　機　能（2）

		中学男子 ハンドボール			中学女子 ハンドボール			高校男子 ハンドボール			高校女子 ハンドボール		
		$\bar{X}$	SD	全国平均	$\bar{X}$	SD	全国平均	$\bar{X}$	SD	全国平均	$\bar{X}$	SD	全国平均
パワー	垂直跳 cm	50.8	7.7	45.0	37.6	6.1	35.5	56.6	6.5	56.6	41.3	5.2	38.4
	遠投 m	30.7	4.3	22.9	21.8	2.7	15.1	34.5	4.6	27.9	24.7	3.2	16.4
	立三回跳	6.60	0.49	—	5.46	0.39	—	7.12	0.45	—	5.60	0.47	—
持久性	腕立伏臥腕屈伸	36.5	25.6	—	21.3	6.7	—	51.9	17.4	—	23.2	10.1	—
	H・S・T												
柔軟性	体前屈	8.7	5.3	12.1	13.7	4.8	14.8	15.4	5.1	16.3	16.2	5.1	17.8
	上体そらし	51.4	9.0	51.1	57.5	5.8	54.0	56.8	7.7	57.3	57.4	7.5	57.4

		大学男子 ハンドボール			大学女子 ハンドボール			一般男子 ハンドボール			一般女子 ハンドボール		
		$\bar{X}$	SD	全国平均	$\bar{X}$	SD	全国平均	$\bar{X}$	SD	全国平均	$\bar{X}$	SD	全国平均
パワー	垂直跳 cm	58.1	7.7	58.3	45.2	4.9	39.0	57.5	7.6	—	45.0	5.9	—
	遠投 m	38.5	4.2	28.2	25.9	2.4	16.3	40.2	8.1	—	29.2	2.3	—
	立三回跳	7.12	0.70	—	5.93	0.48	—	7.34	0.45	—	5.98	0.40	—
持久性	腕立伏臥腕屈伸 回	52.7	20.0	—	26.4	14.7	—	43.8	20.4	—	30.5	9.6	—
	H・S・T												
柔軟性	体前屈 cm	15.2	8.8	16.0	18.4	5.0	17.5	15.7	4.6	—	18.6	4.4	—
	上体そらし cm	56.5	9.2	57.6	56.4	6.3	57.5	57.0	6.4	—	57.9	6.9	—

様のテスト項目がないのでここでは結果のみに留め、他は省略する
背筋力は全国平均と較べ全段階層で優れていることがわかる。
特に男子については中学より高校間に著しい発達を示していることがうかがえる。
それ以後の大学、一般の段階では発達は見られずこの時期の筋力トレーニングの不足を物語っているのではないか。
これを女子についてみると中学高校、大学、一般と微力ではあるが段階を経て発達しているようである。次に握力についてみると前述の方法で全国平均値と比較検討を加えると、各々男女とも大きな開きはないようである。ただ中学女子においては有意差はないが、数字的な面より少し値が小さい。
これは中学女子ハンドボールチーム数が少ないのであるいは比較対象とするに当たらないかも知れぬ。
以上をハンドボールの段階別にみると男子においては背筋力と同よう、中学から高校の間に著しい発達を示しており、大学、一般と漸次伸びている傾向にある。女子については高校より上はあまり発達を示していない。敏捷性については全国との比較資料がないので検討はできないが、これを各発達段階でみると20ｍ走については測定の技術の問題もあり、これを解釈するには大きな難点があることは当然とみるが、男子においては中学、高校より大学、一般がよいことがうかがわれる。女子については全般的な大きな変動がないと観察する。
9ｍ3往復については男女とも発達段階に応じて伸びている。5回連続ローリングについては男子において高校に良い値を示している。女子は大学が高校男子に次いで良い値を示している（これらの敏捷性テストは今後検討を加える必要があると考える）。

C　機能Ⅱ（第3表参照）

第3表は技能面の持久性、パワー、柔軟性である。
全国平均より総体的にすぐれているのは当然と思われるが、これらの項目については「ハンドボール投げ」を除いては、必ずしもそうとはいえないのである。
柔軟性にいたっては殆どの種別で全国平均を下まわっている。
「ハンドボール投げ」においてはすべての種別で大きな差をもって秀れているが、これはハンドボール競技の特性上当然のことであろう。
「垂直とび」においては総体的に全国平均より秀れているが、中学男子、大学女子を除いては大きな差はなく、大学男子においては全国平均より下まわっている。
ハンドボール競技はパワーの発揮される場が非常に多い種目であり、一般の人より相当な差があるものと期待されたが、あまり著しい結果は得られていない。
男子と女子とを比較してみるとパワーや持久性の面では男子が相当の差をもって秀れているが、柔軟性については男子より女子の方が秀れている。
「立ち三段とび」「腕立伏臥」については、全国平均にその項目がないので比較することができないのが、全項目について発達段階に応じてみると、総体的に中学から高校のあいだでは、その発達は減少し大学から一般のあいだでは停滞していることが判った。

ハンドボールと指導要領

◇中学校

昭和33年に定められた中学校教育課程も10余年を得て国民の生活水準、文化の向上また国際的地位の向上など現実と離れた存在個所が見出され今回の改訂となったのである。
中学校教育において人間としての調和と統一のある発達をめざす中で健康と体力の増進を図ることが要点とされ、男子、女子ともに昔日に比して体格の伸長著しいものが見られ、而も筋力、持久力、調整力などの体力は比例せず体力の要素によっては、かえって低下する傾向さえある。これは生活環境の変化によるところ大であるが運動の場の制限、運動する機会の抑制などに基く運動不足が原因と云われている。
保健体育科では生徒の健康保持増進と体力の向上を特に留意、指導すべく盛られている。
改訂の目標は
(1)　生徒の健康の保持増進と体力の向上について強調すること
(2)　各学年の目標と内容については教科内容の性格上、保健と体育の両分野別にする。
体育分野の内容的なものをあげれば体操に柔軟性と歩・走・跳・投の全身運動を加えておりスポーツは従来と同ように器械運動、陸上競技、水泳、格技、球技、ダンス（女子）及び体育に関する知識とし陸上競技では走・跳・投についての基礎的な内容を採りあげゴール型とネット型の運動のなかから代表的なものを採りあげる。
各運動領域の取り扱いについては、B項で「球技におけるサッカーでは運動場が狭く充分な指導ができない場合は他の種目（球技）に代えられること。またハンドボールとバスケットボールはいずれか一つ選択して指導すること」としている。
ハンドボール競技の立ち場からいえば、今回組み入れられたことは極めて重要な意味をもつ。ハンドボールという球技が教材として多くの利点があることが再認識されたのは喜ばしい。――男女ともに実施できる共通種目である点並びに今回の改訂の特色である目的と方法の一致等との評価がなされ認識されたと考えられるからである。

ハンドボールの学習内容

前記した球技の中にはハンドボール、バスケットボール、バレーボール、サッカー（男子）と4種目が採りあげられ、各々その学習内容が記されている。特にハンドボールの項だけあげれば次のようである。

◇

ハンドボールの技能はバスケットボールの技能に類似している点が多いので個人的技能、集団的技能及びゲームのいずれもバスケットボールの技能と同ようの考えかたで構成している。

(ア)　個人的技能

個人的技能としてパス、ドリブル、シュート、フットワークを採りあげている。
パスにはチェストパス、両手または片手のアンダー・ハンドパスショルダー・パスが含まれている
味方や相手の位置に応じて使い分けできることが必要であり集団技能の成立に大きく影響するものである。

シュートにはジャンプシュートや倒れこみシュートなども含まれるがただ無理にシュートするのではなくドリブルやフットワークと結びつけて場面に応じて使えることが重要である。

例えばゴールに向かってまっすぐ又は斜めに走りこみながらパスを受けとめた後フェイントを使って相手の逆をついてドリブルで抜き去り、または離れてシュートができるようにすることとである。

フットワークでは攻撃者に対して良い位置に動きゴールエリア附近でも攻撃者よりゴール側に位置したままついて動き、守備ができることが大切である。また相手のパスで自分の近くを通る者に対してタイミングよく飛び出してカットができるようにする。

ゴールキーパー（GK）はボールの位置に応じて構える位置を変えながらボールを見、手足を使ってシュートボールを止めて、ゴール守備ができるようにすることである。

指導の要点としては、速い動作の中にも正確なキャッチ、パスがもっとも要求されるので安定したフォームを作ることが重要だ。

そして個人の技能の関連として集団的技能があることを強調する

(イ) 集団的技能

a速攻……速攻では相手シュートをGKが防禦した後、GKのロングパスを受けてワンマンダッシュや逆サイドの味方と連携して攻めたり防禦中にパスカットやドリブルカットした所から二〜三人が走ってショートパスによる速攻ができることである。

指導の要点としては相手の防禦態勢が整わないうちに素早く攻めこむようにすること。走っている味方に正確にパスが通るようにすることである。

bカットイン・プレー……2＝2、3＝3でカットインしたり、クロスリターンを使った攻めやフェイントしてドリブルインなどを使って攻められるようにすることである。

指導の要点としては瞬間的に相手を引き離して攻めこめるようにすることである。

cポスト・プレー……相手の防禦体形を見ながら動き機会をみて素早くポストマンにパスして攻めることが大切である。2・4システムや1・5システムの防禦に対して8字ローリング、クロスリターンやポストプレーを活用し人の動きとパスで相手をゆさぶり、カットインからジャンプシュートだけでなくポストからの倒れこみシュートなどでも攻撃できるようにすることが必要であろう。

d対人防禦……原則的にはバスケットボールの場合に準じて考えている。指導の要点としては相手の動きに先んじてマークできること、防禦の相手を交替することが随時すばやくできるようにすることである。

e地域防禦……二人が横に並び三人は三角形になるように構えて協力して間をあけないように動き合いパスをカットしたりドリブルインを防いだり、シュートをさせないように守る。

また2・4システムや1・5システムの位置と役割が判り相互に連携をとって守れるようにすることである。

指導の要点としてはボールの位置に留意してパスやドリブルインあるいはシュートを防ぐことである。

味方が互いに協力してよく動きシュートを防ぎ、あるいはパスカットをするなどして攻め返すところにある。

(ウ) ゲーム

ゲームの内容としては既習の技能を利用したものを考えている。攻撃面では全員が広がって動き、途中カットインしたものにボールをパスしたり交差して走っている間にリターンパスプレーをするなどして積極的に攻めるようにする。

また、より組織だった動きとパスワークで速攻をしたり相手の防禦体形に応じてポストプレーを使ったりして攻撃する。

防禦についてはマン・ツウマンで守るが、速くスリースローラインとゴールエリアラインの間の地域にもどり、この附近で攻撃者をとらえボール保持者の近くの者は協力してパスをカットしたりドリブルインを防ぐようにする。

また2＝4システムや1＝5システムのゾーンディフェンスも出来るようにGKからボールを速くパスして速攻に転ずることもできるようにする。

なお、ルールについては相手の身体を抑えないこと、ボールを持って「3歩・3秒」を越えないこと、ゴールエリアはGK以外は入れないことなどの基本的なものから、各種スローインからのゲームのはじめかた、特にゴールエリア近くでの攻撃側のフリースローやコーナースロー、また7Mスローやレフェリースローなどを理解させながらゲームが出来るようにする。

指導の要点としては技能の程度や指導の段階に応じチームの人数ゲームの時間、ルールの扱いなどを具体的に決め攻防の策戦をたててゲームができるようにすることである。

なお審判についてもプレーに支障を起こさない限りコート内を動いて判定するなどゲームの運営ができるように指導する必要がある

内容の構成については奥深くもまた浅くも広くも観せるようになっている。

ハンドボールは必修選択というかたちをとるが、指導段階において初歩的段階、進んだ段階、さらに進んだ段階の三つを踏めるようになっている。これは内容の取り扱いのなかで各学年に適切に配当して指導するものと記されていることを合致する。

中学、高校の指導の比較

◇高等学校

高校の学習指導要領に於いても内容的には中学のそれと大差なくただ集団技能のカットインプレーポストプレーの代りにセットオフェンスつまり考えたプレー、策戦的な攻撃ができる年令である点を加味されている。

またゲームの所では「作戦」と明記され、ただゲームができるだけでなく中学校の上にさらに高度なものを要求している。そして「規則」及び「審判」と付加され自主的運営をできるところまでの指導が求められている。

◇中学校・高等学校の比較

	【中学校】	【高　校】
▽個人的技能	パス、ドリブル、シュート、フットワーク	パス、ドリブル、シュート、フットワーク
△集団的技能	速攻、カットインプレ	速攻、セットオフェ

第4表

習得技能種別				1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	中一	中二	中三
モチベイションエクササイズ				5	5	2	2	2	2	1	1	1	1	1							
個人的技能	攻撃	基礎	パス	10	10	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	◎	◉	◉
			ドリブル		5	3	1	1													
			シュート			5	4	4	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	◎	◉	◉
			フェント							2	2	2	2	2						○	◎
			フットワーク			5	4	2	2	2										◎	◎
		応用	パス	10	10	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	◉	◉	◉
			ドリブル		5	3	1	1	1	1									◎	◎	◎
			シュート				5	4	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	◎	◎	◉
			ボディワーク								3	2	1	1	1	1				○	◎
	防禦	基礎	ボディコントロール			3	2	2	2	2	2	2	2							○	◎
		応用	ビジョン				2	2	2	2	1	1	1							○	◎
集団的技能	攻撃	基礎	リターンパスプレー			5	5	4	3	2									◎	◎	◎
			カットインプレー						3	2	2	2	2						○	◎	◉
		応用	スクリーンプレー								1	3	3	4	5				○	◎	◉
			カットインプレー								1	3	3	4	5				○	◎	◉
			ポストプレー			2	2	6	3	3									◎	◎	◎
			スカイプレー										1	2	4	4				○	◎
			速攻								3	2	2	3	4	4			○	◎	◉
			セットオフエンス						5	4	2	3	7	7	3	5	5	5	◎	◎	◉
	防禦	基礎	コミニケーション							3	1	1	1	1						○	◎
		応用	対人防禦		4	3	2	1	1										○	◎	◎
			地域防禦			3	2	2	1	1									○	◎	◉
ゲーム	ゲーム	攻撃	ゴールキーピングより攻				2	1	1	1					ゲーム	ゲーム	ゲーム	ゲーム	◉	◉	◉
			N 型						2	2	2										
			M 型							2	2	3									
			L 型								3	3	3	2							
		防禦	ゴールキーパーを中心として				2	2	1	1	1				(15)	(15)	(20)	(20)			
			一線防禦			2	1														
			1―5 システム				2	1													
			2―4 システム					2	1												
	ルール	競技用語	練習用語		3	1	1	1	1	1									○	◎	◉
			試合用語							1	1	2	3	3	2	1	1		○	◎	◉
		規則	簡単な規則	10	3	2	1	1											◎	○	
			競技規則						1	1	1	2	2	3	3	3	5	5	○	◎	◉
		審判	簡単な反則					1	1	1	1	1	1						◉	◎	○
			アドバンテージ											2	2	2	4	5		○	◎
時間計	(分)			35	40	45	45	45	45	45	45	45	45	45	45	45	45	45			

○◎◉は強弱を表現する、

ー、ポストプレー、対人防禦、地域防禦	ンス、対人防禦、地域防禦
▽ゲーム　既習の技能を利用したゲーム	作戦、規則、審判

格技、球技、ダンスについては生徒の能力・適性に応じて選択して取り扱う必修選択である。

球技はバスケットボール、バレーボール、サッカー、ラグビーの5種目中2種目を必修としている。スキルの点、コートの件、運動量などについて5種目中ハンドボールはもっとも適した球技であるということができる。

中学における指導内容

中学校の保健体育においては年間125単位時間、3年間で375単位時間となる。そして各分野に当てる時間は305単位時間を標準とされ各学年に等しく配当し「保健」として第1学年20単位時間、第2、3学年に各25単位時間で計70単位時間を差し引くと、「体育」は100〜105単位時間が各学年配当となる。

そして体育分野として各学年別内容の手がかりとして初歩的段階進んだ段階、さらに進んだ段階としてみることが望ましいとされ、

下記の表のように大きく区分されこのうち球技として採りあげられるのはハンドボール、バスケットボール、バレーボール、サッカー（男）の4種目で構成、集団対集団の相手との関連に於いて全員が直接または間接に組み立て活用の場としてゲームを考え、互いに関連したドリルを持たせている。その内容としては多々あるが各現場の実態もあるとして一般的なものをあげ、さらにその配当時間中に、而もその1時間内におけるドリルのとりかた及び継続動向を考えてみるとだいたい第4表のようなものになることが最良と考えられる。

種目	男子	女子
体操	10〜15%	10〜15%
器械運動	10〜15	10〜15
陸上競技	10〜15	10〜15
水泳	5〜10	5〜10
格技	10〜20	〜
球技	30〜35	25〜30
ダンス	〜	15〜25
体育に関する知識	5〜10	5〜10

【以下次号】

＜注＞「ハンドボール指導テキスト」はかねてからその作成が望まれていたもので、普及部の手によりようやく草案ができあがった。普及部あるいは本誌編集部に御意見をお寄せ願いたい。

☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆

海外トピックス

——杉山　茂——

グンメルスバッハの3連勝成らず

〜男子ヨーロッパ杯〜

1・2月は珍しくビッグトーナメントがなく、ヨーロッパの話題はもっぱら終盤を迎えた第12回男子ヨーロッパカップトーナメントに集っていたようだ。

波乱がつづいた準々決勝(既報)の余波は準決勝にも及び第1戦の勝者が第2戦で激しく追われるもつれた展開をみせた。

史上初の3連勝を狙うグンメルスバッハ（西ドイツ、昨春来日）はタトラン・プレソフ（チェコ）を第1戦一方的に破り、第2戦は19—18という乱戦で敗れた。

また、パルチザン・ブジェロバル（ユーゴ）——MAIモスクワ（ソビエト）はブジェロバルが初戦を7点差でものにしながら第2戦を11—17で落とし、わずか1点差で決勝進出を決めるキワどさだった。決勝戦は2月19日ドルトムントで約一万三千の観衆を集めて行われ、予想をくつがえしてブジェロバルが後半、得意の速攻でリードを奪い初優勝した。

（決勝の詳報は次号）

▽準決勝

パルチザン・ブジェロバル（ユーゴ）　21（10—7、11—7）14　MAI・モスクワ（ソビエト）

MAI・モスクワ　17（7—6、10—5）11　パルチザン・ブジェロバル

2試合計32—31でパルチザン。

グンメルスバッハ（西ドイツ）　12（6—1、6—4）5　タトラン・プレソフ（チェコ）

タトラン・プレソフ　19（9—10、10—8）18　グンメルスバッハ

2試合計30—24でグンメルスバッハ。

▽決勝

パルチザン・ブジェロバル　19（10—5、9—9）14　グンメルスバッハ

女子も強豪が順調

一方第11回女子ヨーロッパカップは1月末までに1回戦が終了、3連勝を狙うスパルタク・キエフ（ソビエト）をはじめプラスティカ・ニタ（チェコ）、SC・ライプチヒ（東ドイツ）、ブカレスト大学（ルーマニア）ら強豪が順当に準々決勝へ勝ちあがった。

ソビエト、2大会に楽勝

オリンピック地域予選を間近かに控えた各国はしきりとテストマッチを繰り返しているが、1月末に行われた2大会ではソビエトが余裕を示して優勝を飾った。

なお、西ドイツ南部国際トーナメントで、ドイツ南部選抜の一員としてルブキングが久々に姿をみせ3試合で17点をマークした。

◇西ドイツ南部国際トーナメント（1月）

▽予選リーグA組

西ドイツ南部　19—11　チュニジア

ソビエト　17—5　チュニジア

ソビエト　18—10　西ドイツ南部

▽同B組

スイス　10—8　南バーデン

南バーデン　10—9　デンマーク

スイス　17—12　デンマーク

▽5位決定戦

デンマーク　12—10　チュニジア

▽3位決定戦

西ドイツ南部　11—10　南バーデン

▽決勝

ソビエト　12（5—1、7—5）6　スイス

◇ジンゲン（西ドイツ）国際招待トーナメント（1月）

ソビエト　11—3　チュニジア

デンマーク　13—12　チュニジア

ソビエト　19—8　スイス

ソビエト　13（5—5、8—5）10　デンマーク

スイス　14—9　チュニジア

デンマーク　10—7　スイス

※

このほか予選出場国の主な交流記録は次のとおり

ポーランド　28—19　オーストリア

ポーランド　24—11　オーストリア

オーストリア　28—11　イタリア

オーストリア　27—8　イタリア

オーストリア　22—9　イタリア

フランス　16—12　スイス

フランス　15—13　スイス

スイス　14（分）14　オランダ

スイス　18—11　オランダ

東ドイツ、ユーゴに苦杯

東ドイツ女子国際トーナメントは1月末4ケ国が参加して行われ世界選手権1、2位の東ドイツ、ユーゴが2勝1敗となり得失点差でユーゴが優勝、デンマークがユーゴを破り注目された。

ルーマニア　9—8　デンマーク

ユーゴ　12—10　東ドイツ

デンマーク　13—12　ユーゴ

東ドイツ　14—13　ルーマニア

ユーゴ　12—9　ルーマニア

東ドイツ　8—6　デンマーク

西ドイツ選手権終る

今シーズンの西ドイツチャンピオンを決めるファイナル・ラウンド(決勝トーナメント)は北部リーグ1・2位のVFL・グンメルスバッハ（昨春来日）、THW・キール（今春来日）、南部リーグ1・2位のFAギョッピンゲン、TV・グロスワルスタットの4クラブによって行われていたが、決勝はギョッピンゲン×グンメルスバッハの顔合せとなり、前半7—7の接戦から、後半ギョッピンゲンがわずかに押し勝ち14—12で初優勝した

近づくヨーロッパ、アフリカ予選

待望のミュンヘンオリンピックまであと半年、アジア、アフリカ予選についで3月に入ると注目のヨーロッパ予選が行われ、月末のアフリカ予選で全代表16ケ国が勢揃いする。

興味ある"4・5番目"の座

～ヨーロッパ地域～

▽期間 3月15～24日▽開催地スペイン（マドリッドほか）▽参加16ケ国、代表5ケ国

一昨年の世界選手権（パリ）でルーマニアほかトップクラスの8ケ国がすでに代表権を得ており、いわばBグループの戦いだがソビエト、ノルウェーなどメダルを狙える強豪の顔も見え好内容となりそう。

4ケ国づつ4組の予選リーグを勝ち抜くのはA組でアイスランドノルウェー（ほかにフインランドベルギー）、C組でスイス、スペイン（ほかにルクセンブルグ、イギリス）、D組でソビエト、ポーランド（ほかにイタリア、ポルトガル）。

実力伯仲なのはB組。各国とも強化に必死で互いの戦力分析も盛んだ。先シーズンまではフランスオランダが一歩リードしているとみられていたが、ブルガリア、オーストリアの追いあげも鋭く予断を許さない。

準決勝リーグは順当なら1組はアイスランド、ノルウェー、フランス、オランダ、2組はスイス、スペイン、ソビエト、ポーランドとなり1組のノルウェー、2組のソビエト、ポーランドの有利はここでも動くまい。

問題は残る二つのワクだ。アイスランドが僅差で抜け、あとをフランス、オランダ、スイス、スペイン、ブルガリアが激しく追う。ルーマニアと1勝1敗（19－16 9－21）のスイス、そのスイスを連破したフランス、地元で意気あがるスペイン。すさまじい争いになりそうである。

このほか、北欧でもまれるフィンランド、新進イタリアの試合ぶりも注目され、ルクセンブルグには2m02のシュンメル、1m97のカルペンと二人の巨人選手がおり話題になっている。

16ケ国はいずれもオリンピックを機会に国内スポーツ界におけるハンドボールの「位置づけ」をしようとしており、それだけにエキサイトした展開がつづきそうだ。

チュニジアが有力

～アフリカ地域～

▽期間 3月25～30日▽開催地チュニジア▽参加6ケ国、代表1ケ国

強化に積極的なチュニジア、アルジェリア、アラブ連合（エジプト）の争いとみるのが順当。

なかでもチュニジアはサッカーにつづく人気スポーツにのしあがっているといわれ熱の入れかたも高い。

ソビエト、デンマークなどとの交流のほか昨年のマグレブカップでアルジェリア、モロッコを破った自信もモノをいいそうである。

アラブ連合も古い球歴をもつが最近ではイタリアに21－12、26－15と連勝、オーストリアに13－21で敗れたという情報があるだけ。

アルジェリアは東ドイツと比較的交流が多い。モロッコ、セネガル、カメルーンについてはあまり資料がないがセネガルがかなり腕をあげていると聞く。

(S)

アメリカも出場権を握る

ミュンヘン・オリンピックのアメリカ地域予選は2月1日からアメリカイリノイ州のエルクハートに4ケ国が集り、リーグ戦で行われた。

予想どおり、これまで国際経験の多いアメリカ、カナダの北米勢がアルゼンチン、メキシコの南米勢をリード、代表権争いはアメリカ×カナダの最終戦にかかりアメリカが後半好守備を見せて優位に立ち快勝、ミュンヘン行きが決まった。

アメリカは、一九三六年のベルリン大会にも参加している。

これでミュンヘンオリンピックの出場権を得た国は次の10ケ国となった。

日本（アジア）、アメリカ（アメリカ）、ルーマニア、東ドイツ、ユーゴ、デンマーク、西ドイツ、スウェーデン、チェコ、ハンガリー（以上IHF推せん）

▽アメリカ大陸予選

アメリカ	33	17－8 16－3	11	メキシコ
カナダ	22	11－6 11－5	11	アルゼンチン
アメリカ	22	15－7 7－6	13	アルゼンチン
カナダ	24	12－3 12－3	6	メキシコ
アルゼンチン	29		20	メキシコ
アメリカ	15	6－2 9－9	11	カナダ

【順位】①アメリカ勝ち点6②カナダ4③アルゼンチン2④カナダ0

ミュンヘンオリンピック日本ハンドボール応援団募集について

主催　日本ハンドボール協会
期間　8月26日～9月13日
人員　先着　40名
費用　三八五、〇〇〇円（但し入場券・旅券代・注射代その他個人的費用は含まず）
旅程（予定）
8月26日　東京22・15発
8月27日～8月29日　ロンドン（市内観光ほか）
8月29日～9月4日　ミュンヘン（オリンピックハンドボール観戦）
9月4日～9月6日　コペンハーゲン（古城めぐりほか）
9月6日～9月8日　パリ（市内観光ほか）
9月8日～9月10日　チューリッヒ（ルツェンピラトス山観光ほか）
9月10日～9月12日　ローマ（市内観光ほか）
9月13日　東京19・50着

◎

なお本件につき問合せは
名古屋市千種区豊年町三の三七（〒四六四）
全日本実業団ハンドボール連盟
田中滋章まで
（電）〇五二（731）一四四六
詳細は次号にも掲載します。

大同製鋼、得失点差で位

実業団4強親善リーグ

東西実業団4強親善リーグ戦は1月15・16日の両日大阪・豊中市民体育館で開かれた。

参加したのは全日本実業団選手権のビッグフォア。

これまでは〃4社定期戦〃という性格で各社のコートなどを使い非公開だった大会。

〃親善〃と銘打っても国内最上位に立つ4チームのこと、10人のオリンピック候補を中心に公式戦なみの激戦をつづけた。

第1日、全日本チャンピオン・大崎電気（埼玉）が大同製鋼（愛知）に敗れ、この日2勝をマークしたワクナガ薬品（大阪）が優勢とみられたが、最終戦でワクナガは大崎に倒され、結局大同、ワクナガ、大崎が同率で並び得失点差で大同製鋼の首位が決まった。

ワクナガ薬品（大阪）　20（10－8、10－7）15　大同製鋼（愛知）
大崎電気（埼玉）　21（13－6、8－7）13　三景（東京）
ワクナガ薬品　25（11－11、14－9）20　三景
大同製鋼　26（13－7、13－8）15　大崎電気
大同製鋼　23（11－8、12－5）13　三景
大崎電気　11（7－5、4－4）9　ワクナガ薬品

【順位】①大同製鋼2勝1敗（得失点差16）②ワクナガ薬品2勝1敗（8）③大崎電気2勝1敗（マイナス1）④三景3敗

各地の記録

鋼管福山、日新に逆転勝ち

▼第1回広島県総合選手権（2月　広島県立体育館）

▽男子準々決勝
日本鋼管　23－16　松本商高
全広商大　17－13　呉工高
三菱レ大竹　14－11　修道ク
日新製鋼呉　22－12　広島大

▽同準決勝
日本鋼管　13－12　全広商大
日新製鋼呉　17－16　三菱レ大竹

▽同決勝
日本鋼管福山　18（9－5、9－10）15　日新製鋼呉

▽女子準決勝
山陽女高　8－6　一女商OG
山陽女OG　17－0　広島一女商

▽決勝
山陽女OG　11（2－0、9－4）4　山陽女高

大同製鋼、危気なし

▼第20回愛知県実業団リーグ（2月・名古屋市体育館）

▽1部
トヨタ車体　24－13　トヨタ自工
三友工業　23－12　トヨタ自工
トヨタ自工　19－17　日本碍子
大同製鋼　24－11　トヨタ車体
新日鉄　24－7　日本碍子
トヨタ車体　－　日本碍子
トヨタ車体　16－14　三友工業
大同製鋼　25－9　日本碍子
トヨタ車体　20－13　新日鉄
大同製鋼　31－16　トヨタ自工
新日鉄　14－10　三友工業
大同製鋼　25－20　新日鉄
新日鉄　23－13　トヨタ自工
三友工業　21－11　日本碍子
大同製鋼　21－14　三友工業

【順位】①大同製鋼5戦全勝②トヨタ車体4勝1敗③新日鉄3勝2敗④三友工業⑤トヨタ自工⑥日本碍子

【2部順位】①ブラザー工業②三菱重工③タヨシ産業④パイロットインキ⑤豊田工機⑥トヨタ学園⑦中部電力

女子で井草高1位

▼東京都城北地区選手権（1月・池袋商）

▽男子順位①ハタクラブ②井草高③駿台ク

▽女子順位①井草高②赤羽商高③池袋商高

イーグルス、ワクナガを降す

▼大阪室内選手権（1月、市中央体育館、府立体育館）

男子23チーム、女子4チームが参加。4日間にわたって熱戦をくりひろげ、イーグルスは2回戦で大山商会を降し、決勝では、前半のリードを生かし、ワクナガを押しきり二連勝を飾った。

一方、女子は各高校のOGの対戦となったが、大谷クがぬけだした。

▽男子準々決勝（＝三回戦）
イーグルス 16－8 エースク
佐野工クB 25－11 三国丘ク
春日丘ク 22－17 都島ク
湧永薬品 23－2 城東ク
▽同準決勝
イーグルス 18－9 春日丘ク
湧永薬品 16－11 佐野工クB
▽同決勝
イーグルス 23（5－9、4－15）9 湧永薬品

▽一般女子準決勝（＝一回戦）
大谷ク 16－2 大淀ク
住吉学園ク 5－4 寝屋川ク
▽同決勝
大谷ク 9（1－4、4－5）5 住吉学園ク

群馬教員が初優勝

第12回群馬県総合選手権（1月・前橋商高）

▼男子準々決勝
富岡高OB 30－10 前橋商高
光電工業 17－13 桐生工OB
群馬教員 26－22 甘楽農OB
前橋工OB 15－7 富岡商
▽同準決勝
前橋工OB 14－13 光電工業
群馬教員 41－19 富岡高OB
▽同決勝
群馬教員 24（9－9、15－7）16 前橋工OB
▽女子準々決勝
前橋市女 13－3 桐生女
下仁田高 8－5 高崎市女OG
前橋ピジョンズ 18－5 高崎市女
前橋東商 9－6 群馬女短大附高
▽同準決勝
前橋ピジョンズ 22－5 前橋東商
下仁田高 8－7 前橋市女
▽同決勝
下仁田高 12（5－4、7－7）11 前橋ピジョンズ

群馬教員・下仁田高とも初優勝

海上自衛隊佐世保勝つ

▼第3回長崎県室内総合選手権（2月・長崎市国際体育館）＝男子

▽準々決勝
鹿町工高 17－4 全造船
海自佐世保 12－8 長崎工高
佐世保ク 15－10 高島高
全口加高 19－8 長竜会
▽準決勝
海自佐世保 12－10 鹿町工高
佐世保ク 14－8 全国加高
▽決勝
海上自衛隊佐世保 15（9－5、4－8：1－1、1－0）14 佐世保ク

実業団の2県対抗

▼東京・神奈川実業団対抗戦（2月・横浜市平沼記念体育館）

昭和電工（神奈川） 24（9－3、15－2）5 塚本商事（東京）
日進商会（神奈川） 25（15－5、10－7）12 荏原製作所（東京）
日本鋼管（神奈川） 23（7－8、16－13）21 国際経済調査研（東京）
セントラル自動車（神奈川） 37（14－8、23－4）12 サントリー武蔵野（東京）
大崎電気（東京） 23（11－8、12－11）19 日本発条（神奈川）

▼第七回宮城県ハンドボール祭（1月・宮城県スポーツセンター）

一般女子 11－7 高校女子新人選抜
高校男子新人選抜 17－16 OB
高校女子東軍 8－7 高校女子西軍
学生選抜 27－22 一般男子選抜
高校男子東軍 18－16 高校男子西軍

決勝は本田技研同士

▼三重県室内選手権・高校新人大会（1月4日市体育館）

▽一般男子準々決勝
鵜ノ森ク 17－16 三菱油化
本田技研B 32－17 半田ク
本田技研A 25－10 鳥羽商船
三重教員 26－18 三重大
▽同準決勝
本田技研B 17－14 鵜ノ森ク
本田技研A 18－8 三重教員
▽同決勝
本田技研A 22（10－4、12－5）9 本田技研B
▽高校男子準々決勝（三試合）
四日市工 24－4 津
高田 23－14 亀山
四日市 18－13 四日市商
▽同準決勝
四日市工 37－3 高田
津工 24－15 四日市
▽同決勝
四日市工 26（13－4、13－1）5 津工
▽高校女子準々決勝
亀山 16－2 上野
暁 20－2 菰野
津女 32－2 松坂女
上野商 8－3 メリノール
▽同準決勝
暁 12－7 亀山
津女 10－1 上野商
▽同決勝
津女 7（6－3、1－2）5 暁

市川高初優勝を飾る

▼第3回千葉県室内選手権・高校室内選手権（1月・市原市）

▽一般男子準々決勝（一試合）
丸善石油 11－11 館空ク
▽同準決勝
千葉教員 21－11 三術校
海上第4航空群 27－12 丸善石油
▽同決勝
千葉教員 28（16－8、12－6）14 海上第4航空群
▽高校男子準々決勝
市川 不戦勝 小金
清水 9－7 木更津
八千代 7－6 佐原
鶴舞 10－4 東邦
▽同準決勝
市川 15－5 清水
八千代 7－5 鶴舞
▽同決勝
市川 11（7－1、4－2）3 八千代
▽高校女子準々決勝（一試合）
東邦 4－3 鶴舞
▽同準決勝
昭和学院 10－1 八千代
佐原女 8－2 東邦
▽同決勝
昭和学院 4（2－2、0－0：1－0、1－0）2 佐原女

小禄高OBが勝つ

▼第1回沖縄一般男子クラブ大会（12月・首里中）

▽準々決勝
那覇商OB 20－13 豊見城OB
沖縄ク 19－14 浦添OB
那覇ク 13－11 糸満OB
小禄OB 24－10 知・工ク
▽同準決勝
小禄OB 20－12 那覇ク

那覇商ＯＢ 29―12 沖縄ク
▽同決勝
小禄ＯＢ 15（4―7 11―5）12 那覇商ＯＢ

女子で青森西高ゆるがず

▼第2回青森県教育長杯争奪高校選手権大会（1月・青森西高）
▽男子1回戦（3試合）
七戸 20―5 青森商
三本木 11―6 弘前南
鯵ヶ沢 14―13 柏木農
▽同準決勝
七戸 21―3 青森東
鯵ヶ沢 13―7 三本木
▽同決勝
鯵ヶ沢 15（5―5 10―5）10 七戸
▽女子決勝リーグ
青森西 12―0 青森
三本木 6―3 七戸
七戸 11―5 青森
青森西 13―0 三本木
青森西 15―3 七戸
【順位】①青森西②三本木③七戸④青森

男子の上位は実業団

▼第3回刈谷地区（愛知）選手権（1月・トヨタ車体体育館）
▽男子決勝リーグ
トヨタ車体 23―3 豊田工機
トヨタ自動車 11―10 豊田工機
トヨタ車体 20―11 トヨタ自動車
▽同4～6位決定リーグ
トヨタ車体B 18―9 トヨタ学園
昭和ク 20―13 トヨタ学園
トヨタ車体B 15―8 昭和ク
▽同7―9位決定リーグ
豊田工高 8―7 豊田高専
豊田高専 13―9 刈谷工高
豊田工高 9―8 刈谷工高
【順位】①トヨタ車体＝2連勝②トヨタ自動車③豊田工機④トヨタ車体B⑤昭和ク⑥トヨタ学園⑦豊田工高⑧豊田高⑨刈谷工高
▽女子
豊田工機 8（6―0 2―1）1 刈谷北高
豊田工機 4（1―2 3―2）4 刈谷北高
引き分け
豊田工機が1勝1分で初優勝。
＜注＞この大会の男子は「同点の場合延長を行わずＦＰ6選手づつによる7ＭＴで勝敗を決める」と規定されていたが適用の試合はなかった。本誌の知るかぎり国内で〝7ＭＴ結着〟を打ち出したのは今大会が初めて。

岡山教員が連続優勝

▼岡山県一般男子選手権（1月・岡山県営体育館）
▽1回戦（2試合）
川崎製鉄 14―12 九州耐火煉瓦
全倉敷 14―7 岡山大
▽同準決勝
岡山教員 23―16 川崎製鉄
全倉敷 15―8 児島柏会
▽同決勝
岡山教員 23（12―5 11―8）13 全倉敷

高校で児島、津山商進出

▼岡山県高校室内選手権（1月・岡山県営体育館）
▽男子準々決勝
倉敷工 14―5 青陵
児島 14―2 水工
倉敷商 15―2 関西
津山商 9―6 操山
▽同準決勝
児島 9―4 倉敷工
津山商 12―5 倉敷商
▽同決勝
児島 12（4―1 8―2）3 津山商
▽女子1回戦（2試合）
西大寺 記録不明 落合
金川 5―0 津山
▽同準決勝
真備 14―2 西大寺
津山商 6―4 金川
▽同決勝
津山商 5（3―0 2―2）2 真備

添上、桜井商強し

▼奈良県高校選手権（1月・桜井商・奈良商）
▽男子準々決勝
添上 16―6 正強
桜井商 7―6 畝傍
奈良 6―2 郡山
生駒 14―6 榛原
▽同準決勝
添上 21―3 桜井商
生駒 6―4 奈良
▽同決勝
添上 6（1―2 5―2）4 生駒
▽女子準決勝
生駒 4―2 添上
桜井商 2―0 郡山
▽同決勝
桜井商 2（1―1 1―0）1 生駒

国学院栃木が男女征覇

▼栃木県高校新人大会（1月・国学院）
▽男子準々決勝
国学院 16―1 足利商
足利工 11―5 烏山
足利 11―10 宇都宮工
馬頭 31―9 石橋
▽同準決勝
国学院 10―8 馬頭
足利工 8―4 足利
▽同決勝
国学院 10（7―4 3―5）9 足利工
▽同3位決定戦
馬頭 17―11 足利
▽女子準々決勝（2試合）
足利女 4―3 馬頭
栃木女 17―11 小山城南
▽同準決勝
足利女 8―4 足利商
国学院 16―3 栃木女
▽同決勝戦
国学院 14（9―1 5―0）1 足利女
▽同3位決定戦
栃木女 不戦勝 足利商

愛知の実業団にハンドボール専用コートが2つ

実業団球界で頭角をあらわしてきた大同製鋼とブラザー工業（ともに愛知）にハンドボール専用ともいえる体育館がこの程完成した。これにより実業団チームも体育館で練習する青白い選手が登場しそうだ。

大同体育館は名古屋市南区大同町の大同製鋼星崎工場内に昨年9月18日竣工した。建築床面積は、3,930m²、フロア面積は43m×30m、観らん席は350である。すでにオリンピック予選出場のナショナルチームが合宿で利用した。

ブラザー体育館は同市瑞穂区熱田東町浜新開の旧コート横に建てられ、本年1月11日竣工した。総床面積4,043m²、フロアは50m×30mのフローリング観らん席は320で1月23日(日)田村日本協会会長も出席してブラザー対田村紡でオープニングゲームを行なつた。欧州帰りの三毛（田村紡）も出場したが8対8で引分け2月20日の東海選手権まで勝負はおあづけとなつた。

ブラザー体育館では7月の五大都市大会が計画され、秩父宮妃殿下もご観戦される予定である。

両体育館とも従来名古屋市にある県市の両体育館より一般と明かるく、目もまばゆいばかりである。両社のチームがこの体育館完成により一層強くなつて欲しいものと熱望する。

ホームコートをもつチームが増えてくればヨーロッパ式の大会運営も夢ではなくなり、両体育館の完工はいろいろな意味で注目してよいものといえよう。（滋）



刈谷市連盟章
（小池美知子案）

全国応募の刈谷市連盟章

愛知・刈谷市連盟が全国に呼びかけて募集した同連盟章のデザインは各地から24名59点が寄せられ1月13日関係者が選考の結果、浜松市の小池美知子さんの作品（別掲カット）に決まった。

連盟章の全国公募というアイデアは斯界でも初めてだろうが稲住晋二・同連盟理事長は『刈谷市連の存在とハンドボールの全国的PR、その上すばらしい連盟章の決定と〝一石三鳥〟の成果があった。北は岩手、南は宮崎まで全国から応募のあったことに感謝したい』と話している。

編集部からのお願い

—本誌購読料値上げについて—

本誌は昭和40年に月刊になり、その後ずっと年間購読料千二百円毎号百五十円の定価をすえ置いておりました。

しかしながら、最近の物価高騰のあおりをまともに受け、毎年々々、財政的には劣悪な条件をしいられるようになってきました。

その間、広告料の値上げ広告主の増大、更には、チーム数の増加、個人講読者の大巾な増加によって、何とか定価すえおきのまま今日までやってくることができました。

この間、印刷費は一回当り十二〜十三万円であったものが、今日では、その倍近くにもなっております。これは印刷費以外の経費を節減することによって、やっときりぬけてきました。

ところが、昨年行なわれました第三種郵便料金の値上げは、従来一冊当り6円の料金が一挙に16円と三倍近い値上げとなりました。これは年間にしますと、一冊当り、一一〇円の値上げとなり、正に直接、本誌の財政の上に大きくのしかかってくるようになりました。今後印刷費はますます高騰することが予想されます。

財政的には、全くどうしようもないところに追いこまれ、このまま定価をすえおくことは、一般会計からの補助なしには雑誌の発行ができない状況にあります。

ところが、一般会計はやはり、財政的に全くピンチに陥いっています。

ここで愛読者の皆様には全く申し訳ないのですが、従来の財政的ヒズミを解決すべく、昭和47年4月1日よりここに50%という大巾な値上げに踏みきらざるを得なくなりました。

47年4月以後、本誌の年間講読料は一千八百円（送料金）一冊は二百円になります。

どうか以上の点、御賢察に頂き、今後とも御愛読頂きますようお願いする次第です。

日本ハンドボール協会編集部

編集後記

本年度もおわり、問題の山積したまま、47年を迎えます。

右記のように本誌も値上げせざるを得なくなりました。内容もそれにふさわしいものにしていきたいと思います。

特に地方からの種々の投稿を熱望しています。何でもけっこうです。およせ下さい。

（F）





日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第九十五号
昭和四十年六月七日 第三種郵便物認可
昭和四十七年二月二十五日印刷 昭和四十七年三月一日発行
発行所 日本ハンドボール協会
東京都渋谷区神南一-一-一
電話 大代表(467)三一一一
振替 東京 五八三四八番
編集兼発行人 保坂周助
定価 百五十円